
M大写真部副部長の喧騒

柏木杏花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M大写真部副部長の喧騒

【Zコード】

Z0777Z

【作者名】

柏木杏花

【あらすじ】

M大写真部。ここは個性が強すぎる後輩が、むやみやたらと集まつてくるサークルだ。絶世の美女にしか見えない一年男子とその彼女。その彼女の辛辣な女友達。ブログの女王に、鉄道マニアの撮り鉄。こんな写真部の副部長を、なぜか平凡きわまりない俺がつとめている。いろいろあるけど、それなりに平和にやってきた。だがある日、俺に許嫁が湧いて出た。しかもその許嫁が小学生ってなんなんだ！俺は自慢じゃないけど十歳年下より、十歳年上の方がいいんだよ。こういう価値観って十年後も二十年後も、変わらない

と思つてゐるのに！ そんな事情で、婚約解消といつた名のハッピーハンディに、いざ突き進む… つもりだつたんだけど……。イマドキの草食男子、松浦惣介のだいたいドタコメ。ちょっとラブコメ。軽くて楽しい話がお好みの方は、お試しください。

第一話 突然の婚約話

「惣介、ちょっと惣介」

「はあ？ なに？」

その日、土曜日の午後だといつのこと、珍しく家で「口々」してたのが悪かったのか、晩ごはんを作ってるお袋にからまれた。

俺は松浦惣介。まつうら そうすけ M大経済学部三年、写真部副部長。他に特筆すべき事柄は、あいにく持ち合わせていない。

自分で言つのも虚しいが、どこにでもいる普通の大学生だ。

「いい若者がだらだらと鬱陶しいわね。あんた、つきあつてる彼女とか、いないの？」

「いないよ」

リビングのソファーに寝そべり、雑誌に目を落としたまま、俺は生返事だ。彼女がいたら、土曜に家で「口々」してるわけがない。平和だ。平穏だ。平凡だ。

子どもの頃から住み慣れた住宅街の一戸建て。夕飯の準備にいそしむ母親から多少からまれたとしても、どうってことはない。

この日はM大の学祭が終わって最初の土曜日だ。副部長という名ばかりの肩書のせいで、写真展ではメインで働いてきたから、家でこんなにのんびりするのも久しぶりだった。

もつとも今夜は写真部の打ち上げコンパだから、夕方には出かけるのだが。

「情けないわね。せつかくひとが、そこそこイケメンに産んであげたつてのに、霸気がないつたら……」

霸気がないのは、まあ認める。万事無難ってのは、俺の個性なんだよな。無難が個性つてのはちょっと変か。
だいたい、イケメンにそこそこの付けてる時点で、産んだ本人も息子を平均点だと評価してるつてことだ。親の欲求ってのはないのかな。

「まあでも、ちょうどいいわ」

「なにが？」

「実はあんた、許嫁がいるのよ」

「はあ？？？」

平凡な俺の、平凡な人生は、こんなひと言で転がり始めた。

「許嫁……？」

許嫁つて、もしかして、もしかしなくとも、婚約者みたいなもんだよな？ みたいというより、そのものなんだろうけど、いきなり許嫁の存在を突きつけられた男なんて、この程度は取り乱すだろう。それにしたつて、この平成のご時世に、結婚相手を親が決めるなんて、一般庶民があり得るの？ あり得ないよなあ。

「母さん、それ、なんの冗談？」

手に持つていた雑誌をテーブルの上に放り出して、俺は座り直した。対面式のシンクで料理の下ごしらえの手を休めることなく、お袋は平静を保っている。

「冗談なんかじゃないわよ。どうせあんたのことだから、だれが相手でもたいして違わないんでしょう。ならいいじゃない」

「違わないわけないだろ。なに言つてんだよ。だいたい、俺まだ大学生なんだから、結婚なんてあり得ないし……」

「だれがいますぐ結婚しちゃなんて言つたのよ。婚約よ

そんなに違わないだろ。 いますぐか、あとかの違ひじゃないか。

「とにかく、相手くらい自分で探すから、許嫁とか完全に却下だからね」

「ものか」「へへ可愛い子なのよ。気にならない?」

「ならない」

「ほら、それよ」

それって、なんだよ。勝ち誇ったみたいに、ふんぞり返つて。

「普通、年頃の男子大学生が、許嫁がいて、その子が可愛いって訊けば、どんな子か気になるはずじゃない。それが間髪入れずに気にならないうつて言い切るのは、おかしいわよ。異常よ。非常識よ」

「非常識なのは母さんだろ。だいたい、万が一『気になる』とか言

つたら、一気になだれ込んで結納の日取りは……とか決めかねない
じゃないか」

そんなトラップに引っかかるほど、俺も伊達に二十一年間、お袋の息子をしてはいなんだ。

「……まさか惣介、あんたホモか不能じやないでしょ」

言つに事欠いて、なんて推測をしやがるかな、このおかんは。

「で、どっちなの？ 白状しなさい」

ちょっと待て。なんで二者択一なんだよ。

「どっちも違います！」

いい加減、怒鳴りたくなつてきたが、あいにくチャイムが鳴つたので、俺は氣を削がれた。

「惣介、出てよ。いま手が離せないわ」

今夜のおかずはハンバーグか餃子なんだろうな。お袋の手が、ひき肉の油でテカテカに光っていた。

第一話 突然の婚約話（後書き）

はじめまして。お読みいただき、ありがとうございます。

もう少し煮詰めてから投稿したかったのですが、結局、見切り発車です。

できるだけ、2、3日以内に更新していきたいのですが、途中で止まるかも(へへへ)

4日以上間が空くときは、活動報告でお知らせします。

久しぶりのコメディーですけど、読んだ人がコメディーのジャンルに入れてくださるのか、妙に不安な船出です。

お気づきのことなどありましたら、教えていただけると嬉しいです。明日も更新予定です。

第一話 なんで許嫁が小学生なんだよ！

俺は頭を搔き鳴りながら、不承不承、玄関に向かった。扶養家族の分際は盛大に辛い。ドアを開けると、待っていたのは斜め向かいに住む女の子だった。

学年は確か、小学五年生だったよな。いまどき、ませた子も多い中で、小柄でおさげなもんだから、年より幼く見える。

「^{じん}凜ちゃん、どうしたの？」

「雄介くんいる？」

雄介は俺の弟だ。一歳年下で、四月からF大に通っている。大学生に小学生が『くん』づけで呼んだりするんだが、凜は俺にも『惣介くん』だ。これは、凜の親が俺ら兄弟をそう呼ぶからである。小さい子どもは、親の呼び方をそのまま真似するからな。

呼び方が変わるのは、中学に行つて、部活とかしてからなんだろうなあと、俺は思つてる。べつにいまの呼び名も嫌じやないし、構わないんだけど。

生まれたときから知つてゐるし、家族の延長みたいな存在だ。

「こま、バイトに行つてるよ」

「そつかあ。残念」

「どうかしたの？」

「算数の宿題、わかんないといあるから、教えてもらいたかったの」

やついえば雄介が、ときどき、凜の勉強みてるって言つてたな。

「俺でよかつたら、みてあげよつか?」

「いいの?」

「いいよ。どう?」

教科書が出てくるのかと思えば、凜が手にしているのは小学五年生のドリルだつた。なんとも懐かしい代物だ。裏返すと『しおう野りん』と小学生らしい文字で名前が書かれてある。まだ習つていない漢字はひらがなだから、庄野凜とは書けないらしい。

わからないという問題を指差されて、俺は唸つた。時間と距離の応用問題だ。これは確かにちょっとややこしい。少なくとも、紙に図を書いてあげないと、わかるようには説明できない。

こんな玄関先で机なんかあるわけないし、やつかいだな。そんなことで思案していると、お袋がエプロンで手を拭きながら出てきた。

「惣介、どなただつたの……あら、凜ちゃん。ああ、宿題しに来たのね。あいにく雄介は留守だけど、惣介でもどうにかなると思うし、上がつて教えてもらいたいなさい」

「母さん、F大よりM大の方が偏差値、上なんだけど……」

「自分で問題を解くのと、ひとに教えるのは別よ。あんたは苦労もせずに理解しちゃうから、わからない気持ちがわからないのよ」

さすが母親。案外、鋭い。実際俺は、理解が早いと言われている。苦手な教科もないが、得意な教科もない。

雄介は苦労して理解する奴だから、一度身に着けた知識は大事に

するし、好き嫌いもはつきりしている。小学生に勉強を教えるのは、雄介みたいな奴の方が、向いてるのかもな。

わざとらしく肩をすぼめて見せてから、リビングに行こうとして、お袋に腕を掴まれた。

「四時から韓流ドラマがあるの。全力で見ないと命にかかわるから、自分の部屋で教えてあげてね」

それでこんな早い時間から、ひき肉を二ねぐり回していたのか。

「間違い起こしちゃ駄目よ」

相手は小学生だぞ。どんな間違いがあるって言つんだ。

「惣介くん、間違いつてなに？ 算数？」

「……間違いなんか全然ないから、大丈夫だよ」

凜の頭をなでながら、俺は溜め息をついた。

凜は俺の部屋に入ると、もの珍しそうにキョロキョロした。そういえば、俺の部屋に入るのは初めてなんだ。親同士が懇意にしていても、それぞれの子どもは年も離れているし、それが普通だうけれど。

「写真がいっぱい」

壁のボードにはぎっちり写真が貼り付けてるし、机や本棚の空い

てる場所にはフレームに収まってる写真が所狭しと置いてあるから、写真みれに見えるんだろう。これでも飾つてあるのは、ほんの一
部なんだが。

「写真部だからね」

中学からせとほど変わり映えがしない部屋は、ベッドと勉強机、あ
とは壁の本棚しかない。

納戸からコタツ机と座布団を持つてきてもいいんだが、どうせ宿
題も一、二問教えればいいだけだろうし、面倒だ。俺は凜を勉強机
に座らせて、雄介の部屋から椅子だけ持つてきた。隣に腰かけると、
凜が愉しそうに笑つた。

「家庭教師の『マーシャルみたい

言われてみればそうだな。

「雄介に教えてもらいうときは違つの？」

「雄介くんは一階で教えてくれるよ

そうだよな。そんなに頻繁でもないみたいだし、今日だつてこんな問題じゃなきゃ玄関先だつてかまわなかつた。

凜がわからなかつた問題は、だれでも躊躇^{つまづ}問題だ。1時間70分
は130分。1・8キロメートルは1800メートル、と考えなければ解^か答^{こた}できない。けれど、130分は何時間何分ですか？ とい
う問題に慣れているから、分に戻す発想になれないんだろう。

凜は最初こそ首を傾げていたが、途中で「あ、そつか、わかつた」と声を弾ませた。

理解力が高い方ではないが、集中力はあるみたいで助かつた。

他の問題も同じ応用で解けるものだったから、宿題は案外ありました。終わらせることができた。

「惣介くん、ありがと！」

「どういたしまして」

持つてきた荷物を手提げ鞄に詰めると、凜は机の上のフォトフレーム手に取つて呟いた。

「「Jのお姉さん、す」「Jく綺麗」

「ああ、そうだね」

俺は頷いた。綺麗なのは間違いない。ただ、お姉さんではなくて、お兄さんだけど、小学生に説明するのも面倒なので細かい情報はスルーだ。

「惣介くんが撮つたの？」

「そうだよ。大学の後輩なんだ」

「へー、大学の女のひとつで、みんなこんなに綺麗なの？ なんかアイドルみたい」

「その子はちょっと、特別だよ」

Jの写真は久しぶりに納得できるものだったから、自分でも気に入っている。一番、田につく場所に置いておきたいくらいには。

「凜ちゃん、おばさんまだ帰っていないの？」

「うん。今日は夜勤なんだって」

慣れているのか、寂しさを表情に出さないのが、かえって痛々しい。一人っ子だから、家に帰つても誰もいないんだよな。凜の母親は看護師で、夜、帰れない日もあるらしい。いや、今田は土曜日だ。親父さんはいないのかな。

「俺はこれから打ち上……」

打ち上げコンパと云いかけて口を噤んだ。小学生にはわかりにくく、言葉だと思い、言い直す。

「えっと…飲み会に行くけど、しばらく下こう。ね袋と韓流ドラマ観なきゃいけないけど」

「うん、帰る」

一人で待つのは慣れてるのかな。そもそも一人でいるのが寂しいのか、羽を伸ばせて愉しいのかもわからないんだよ。俺だってかつては小学五年生だった時期があったはずなんだけど、なにが出来て、なにが出来ないのか、さっぱり思い出せない。

俺の場合、これくらいのときは、ほとんどお袋が家にいたし、雄介もうるむべくまとわりついてたからなあ。

「お父さんがもうすぐ帰つてくれるから」

「やつか

「飲み会つてなんか、お父さんみたい」

小学生からしたら、俺らのすることなんか父親と変わらないんだ
もつか。実際、来年就活が本格化して、うまく内定をもらえば、再
来年は社会人だ。

やることなすこと、父親世代と同じになる。そうなると、お袋が
言つた婚約者も現実味を帯びて迫つてくるのかな。

俺はうきさりした気分で溜め息をついた。

「どうしたの?」

「ああ、いや、わざわざお袋が、許嫁がどうのこうのして言つ
てたんだ。まあ、冗談なんだろうけどね」

小学生相手に、なにを愚痴こぼしてんだる、俺は。

「許嫁の話、まだ訊いてなかつたの?」

「? 凜ちゃん、なんで知つてんの?」

「なんであつて、惣介くんの許嫁、あたしだから……」

お袋が言つてた、ものすごく可愛い許嫁つて……凛……?
そりや、可愛いだらつ。小学生なら、たいていは。

俺がその場で卒倒しかけたことは、言つまでもない。

第一話

なんで許嫁が小学生なんだよー！（後書き）

第二話 学祭打ち上げコンパ

「お疲れ様～」

「無事終わってよかつたね」

「かんぱーい」

M大から一駅のこの居酒屋は、写真部がコンパでよく利用するチーン店だ。

新入生歓迎コンパ、学祭打ち上げコンパ、卒業生追い出しコンパ、この三つをここで行うのが慣例になっている。一階を貸し切ることができるので、気兼ねなく騒げるのだ。

今日参加しているのは、全部で十五人ほど。

四年は内定をもらっているか、大学院に残ることが決まっている者しか来ていないので、他のコンパに比べると出席率は低い。

「今年は本当に良かつたよな。去年とは比べ物にならないくらいこ抗击疫情も立派なものだったぞ」

自嘲氣味に頭を搔いて苦笑するのは、隣に座っている篠崎部長しのざきだ。学祭は一、三年が中心になつて運営するから、四年の部長は、去年メインで動いていた。

学祭で、写真部は個人写真の展示会とは別に、小さな写真をモザイク状に貼り合わせて巨大な名画を制作するのがここ数年、恒例になつているのだが、その名画が特に好評だった。

「佐々木が頑張ってくれたんで」

俺が写真の責任者をねぎらひつと、向かいに座る佐々木は照れくさそうに首を振った。

「いや、写真が早い段階で集まつたからできたんすよ。亜衣ちゃんのおかげです」

がつしりした体格で、色も黒いから熊みたいなやつなんだが、こいつは写真部の有望株だ。カメラの腕もあることながら、フォトショップをデザイナー並みに使いこなす必殺技を持つてゐる。全然似合わないのに……。

どう見ても、ラグビーか柔道でもやらせた方が、向いてそうに見えるんだけどな。

「訊いたよ。ブログの女王が、モデル集めに協力してくれたそぐだな」

ブログの女王、外村亜衣とのむらあいは、今日のコンパに来ている。写真部ではないが、学祭で多大な協力をしてくれたので、感謝の意を表して招待したというわけだ。

「ほんと。亜衣ちゃんには超感謝だよね。写真部は、足向けて寝られないよ」

亜衣に手を合わせて併んでいるのは、小畠さくらだ。文学部一年。飲み会好きのお祭り娘。明るく元気で、性格は少々辛辣つてどこかな。

どうでもいいけど、いつまで併んでいるんだか。あれじや亜衣は仏像扱いだ。

案の定、併まれている本人は、盛大に嫌そうな顔をしている。

「さくらさん、挙まないでください。まだ生きてますから」

亜衣も似たような感想を抱いたのか、迷惑そうに頬を引きつらせていました。さくらは念佛でも唱えそうな勢いだったもんな。

でも、なんだかんだ言つても仲は良いよ。亜衣も学年は一年だけど、さくらと同じ文学部だし。文学部の女子は、ショッちゅうつるんでるよな。よほど、気が合つんだろう。

「とにかく、今年は亜衣ちゃんのおかげで、写真部も勉強になつたよ」

「え？ そうなんですか？」

意外そつに首を傾げる亜衣の顔は、正統派の美人だ。ちょっと欠点が見当たらない。陽気で人当たりもいいから写真部の中にも、ひそかに思いを寄せてる奴がいるんじゃないのかな。

「ブログで告知すれば、写真部の活動も周知できるし、賛同もしてもらえるんだってわかつたからね」

「確かに去年までは思いつかなかつたよな。学外のひとに、大々的に名画のモデルになつてもらおつなんて」

腕を組んだ部長が、感心しきりで何度も頷いている。

名画を制作するのに、千枚近くの写真を貼り合わせるのだが、その一枚一枚にひとを入れる。言わば証明写真を繋ぎ合せるような作業だ。

去年までは、ほとんどが学内の学生に頼み込んで撮影していたから、数を揃えるのが大変だつた。搬入ぎりぎりまで部長や俺ら数人

が大学に泊まり込んで、最後は自分たちで撮り合いながら穴を埋めていく、地獄のような修羅場だったのだ。

ネットをいかに活用するか、この辺のことは、また来年の課題だな。けれど、布石を置けたのは大きな収穫だった。俺は感謝の気持ちで、皿衣のグラスにビールを注いだ。

「ところで部長、就活は終わつたんでしょう？」

「おかげさんで」

「おめでとうござります……って一回田なんですね、お祝い言つた。春に内定もらつたのに、就活続けてたつてことは、納得してなかつたんですか？」

部長がジョッキを傾けるのを、俺は久しぶりに見た気がした。実際、長い間、一緒に飲む機会がなかつたんだよな。

「まあな。やつぱり、ちょっとでも理想に近いとこを目指したかったし」

「耳が痛いですよ。俺もカウンドダウンが始まつてますから」

「松浦、お前は話が来てんだろ？ 学祭の写真にどつかの出版社が興味を持つたつて訊いてるぞ」

「ええ、ありがたい話なんですが、あれはモデルの力ですからね……」

学祭で好評だった名画の取材に来ていた雑誌社が、ついでに見ていった写真展で、俺の写真に興味を持つてくれたというわけだ。で、その写真のモデルが……、

「瀬戸柚希か。そういうや、あの子の正体訊いたときは、正直、腰が抜けるほど驚いたぞ」

部長は、少し離れた場所に座る柚希を眺めて、大きく唸ると首を傾げた。

「こままだに信じられん。あの絶世の美女が男とは……」

「同感です」

俺の部屋にある写真は、夏休みに写真部の後輩を写したものなんだが、その後輩が柚希だ。凜が「このお姉さん、凄く綺麗」と言った、あの写真である。

柚希が抱える問題は極めて複雑怪奇で、説明すると長くなるが、ひとことで言つとしたら、現在の柚希は女装の達人ってことかな。現に今日も、読者モデル並みに可愛らしくセンスのある着こなしを披露している……らしい。ここに着いた途端、女の子に囲まれて、そう騒がれていた。俺にはイマイチよくわからないが。

法学部の一年。亜衣とは中学からの同級生だ。

柚希は一時、悩みを抱え込んでいた時期があつて、相談に乗つたりしていたから、俺にとつては妹みたいな存在である。男だけど……。

「男にしどぐの、勿体なさすぎだろ、あれは」

「部長には、長年連れ添った彼女がいるでしょ」
「が」

「長年過ぎて、空氣みたいだけだな」

確かに、半同棲状態と訊いたよつな、訊いてないよつな……。

「そんなに長いんですか？」

「小中高、一緒に」

「それじゃ、幼なじみの域ですね」

「まあな。つきあい始めたのは中学に入つてからだけだ」

お互い、成長過程を見届けた者同士の恋愛とは、いかなるものなんだらう。正直、想像できない。空氣みたいと言われても、それも考えられないよ。

「結婚とか、考えるんですか？」

「考えな」と言つたら、嘘になるな。他のだれかと……とは到底思えないし、いずれ時期が来れば、あいつと一緒になるだろ」

「小学校のときから、意識してました？」

「いや、からかつて遊んでたな」

だよな。小学生で恋愛とか結婚なんて、考えないよな、普通。結果として小学校からの同級生が結婚相手になることがあつてもさ。俺だつて、小学生の時に、それなりに好きな女の子くら二ついた

はずだけど、いまは顔も思い出せないし。

凜に「許嫁つて、あたしだから」と言われたあと、我に返った俺は、お袋に怒鳴り込もうとして、からうじて止めた。韓流ドラマに相対しているお袋の邪魔をしたら、どんな祟りがあるかわかつたもんじゃない。

あのひとは我が親ながら、正気の沙汰とは思えないようなところがあるからな。俺の忍耐力は、あの母親の所業が育んだものかもしない。

俺はビールのジョッキを傾けながら、肩を落とした。
まさかあの婚約話が真剣なものじゃないだろうけど、凜の耳にも入つてるのが気になる。凜が知つてゐることは、向こうの親も絡んでるつてことだよな。うーん、ビうつなつてんだろ。

「どうかしたのか？ 元気ないな

部長が肩を組んで寄りかかってきた。からんでるのか酔つてゐるのか、どっちなんだろう。しかしこのひと、眼鏡がよく似合つよな。なんかこう、科学者っぽい印象だ。期待を裏切らない理学部だけぞ。

「部長、実は俺、婚約してるんですけど」

「はあ？」

「その婚約相手っていうか、許嫁が小学生なんですよ

「はあ～～？」

「俺、どうかかって『うと熟女の方が好きなんですか』、どうしたらしいんですかね？」

「……お前、良いとこの坊ちゃんが穏やかな人生送つてます、てな感じに見えたけど、隠れ波乱万丈タイプか？」

「なんですか、その隠れ肥満みたいなたとえは」

「いやでも、本当にそいつ見えるしなあ……」

部長は、『やにやと人の悪い顔で、口の端に笑みを乗せた。面白がってるな、これは。』

「でもな、別に、ややこじることないだろ。嫌なら断ればいいだけじゃないか」

「うわの母親の恐怖を知らないから、そんなこと言へるんですよ」

「なんかよくわからんが、それなら、彼女を家に連れて帰つてみる。一発で『破算になるつて』

「今、彼女いないんです」

「あれ？ 確かいたはずだろ？ 美大かどつかの……」

「春先に別れて、それから独り身です」

「すぐ作れよ。ちやつちやと」

「無茶言わないで下せ。晩メシジヤあるまにし、すぐ作つたり

できません

「根性が足りないんだよ、モテないわけでもないのに。とりあえず、いないなら誰か適当な子に頼め。同伴帰宅してくれってな。写真部の後輩でもいいんじゃねえの? 綺麗どころが揃ってるじゃないか」

「うーん……」

酔っぱらいの戯言とはいえ、なんか説得力あるなあ。しかし、同伴帰宅って正しい日本語なのか? もうちょっと適切な言葉、ないわけ? なんか響きが、いかがわしい気がするんだけど。

まあ、お袋の話なんか全然本気にしてないし、無視しちゃいいんだろうけど、凜をすでに巻き込んでるのが気になるんだよ。俺としては、とにかく、穩便に済ませたいわけだ。

しかし、酔ってる部長が寄りかかっていて、いいかげん重い。

「佐々木、佐々木」

俺は佐々木を手招きして呼び寄せると、つっかえ棒係を贈呈した。よし、身が軽くなつたぞ。

佐々木は不服そうな顔をしていたが、お前のその有り余る筋肉を有効利用しないでどうするんだ。

俺は佐々木の肩を叩いて、言い訳するように席を立つと、トイレに向かうこととした。

第二話

学祭打ち上げコンペ（後書き）

第四話 大迷惑な源氏物語

ちょっと酔いを醒まして、二階に戻る。

宴もたけなわ。部屋中にアルコールと料理の匂いが充満し、酔っぱらった部員たちが、ふらふらと身体を揺らしていた。

これくらいの時間帯になると、元いた場所から各自、動き回り、気の合う者同士が、気の合ひ話に花を咲かせている。

出入り口の横では、さくらたちが固まっていた。姫しくも女子の子四人かと思いきや、柚希が混じっていた。と言つても、女子会の雰囲気を損ねるようなものでは、まったくないな。両手に花という感じでもないし、完全に溶け込んでいるのが笑える。

「あ、副部長、こっちは座りませんか？」

さくらに呼ばれて、俺はその女子集団に突入することになつた。さくらに亜衣、柚希は前述のとおりだが、もう一人は松浦碧まつうらあおいだ。碧は文学部一年。この中では、最も長い時間を共有した後輩だが、俺はいまだに碧のことがよくわからない。華奢で童顔。初対面のひとからは高校生に見られているだろう。鎖骨まで伸びた髪がくせ毛で、可愛いといえば可愛い子なんだが、天然でふわふわしていて、どこにピントが合っているのかわかりづらい。

そう、糸のない風船みたいな感じかな。まあ、そういうところも、この子の魅力なんだろうけど。

「何の話で盛り上がつてたの？」

「源氏物語です」

……それって、盛り上がるよいつなネタか？

「光源氏の本命は、藤壺か紫のどひたちだりひつて、現在、白熱したバトルを展開中なんです」

「はあ……？」

不覚だ。

あまり……といふか、全然面白くないグループに紛れ込んでしまった。

「わたしは藤壺派で、亜衣ちゃんは紫派なんです。副部長はどうですか？」

なんかこの、有無も言わぬ強引な一者派で、誰かを思い出すぞ。

しかし、こんな話題で派閥ができるんのか。政治家も真っ青だ。

源氏物語って言われても、ほとんど知らないんだよな。とはいえるが、一応上級生として、知らぬ存じぬでは格好悪いか。えつと確か、男前

前の光源氏が、次々に女を食い散らかす話だったよな。

紫は、子どもの頃から手元に置いて育てた理想の妻で、藤壺は父親の後妻で、憧れの存在……で間違いないかな？

「柚希ちゃんは、どつちなわけ？」

「Jの中では、一番冷静で常識的な感性を持つてそうな、柚希の意見を参考にさせてもらおつ。似たようなことを言つておけば、場違いにはならないはずだ。」

「源氏物語はちゃんと読んでないんですけど、紫に対する行為は、未成年者略取誘拐にある可能性があると思つんです」

ひええええええええええ、源氏物語が、未成年者略取誘拐かよ。
そうか。法学部だもんな。情緒もへつたくれもないな。

「でも、藤壺は父親の後妻ですから、血が繋がっていないとはいっても、直系血族です。よつて、父親が亡くなつても、婚姻関係を結べません。民法第734条に違反します。したがつて、藤壺、紫、ビシリも賛同できません」

…………… そうですね。そうですねとも、はい。……いや、なんか違うぞ！

眩暈がしてきた。

「そもそも、どうして最初の妻をもつと大切にしなかつたのか、そこが理解できないんです。謎に満ちた物語ですね」

柚希の方が、よほど謎に満ちている。といふか、酔っぱらつてゐんじやないの、この子。派手な顔して、あんまり強くないんだよな、アルコールに。いや、顔は関係ないか。うーん、俺も酔っぱらつてるのかな。

そういうえば、光源氏の最初の妻つてだれだつけ？ 全然思い出せないなあ。

柚希の隣で、なぜか碧がそわそわと落ち着かない様子で、ビールを口に運んでいる。どうしたんだろう。

しかし、次々に無差別恋愛を繰り返すのが、源氏物語だろ？ 最初の妻を愛でて終わつたら、それはもう、源氏物語とは呼べないのではないか？

残念ながら、柚希の意見はまったく参考にならなかつた。この理知的な後輩が戦力外とは、きわめて遺憾だ。しかたがないので、俺

は碧に視線を向けた。

「碧ちゃんは？」

先に碧の意見を訊けばよかつた。碧は文学部だから、あんな奇想天外な意見にはならないだろう。

「あたしがもし光源氏だったら、相手が何人いても、そのときはそれぞれ、本気だつたと思うんです」

「なるほど……」

俺は感心して頷いた。が、女の子が源氏物語を読んで、自分がもし光源氏だったら……なんて考えるものなの？

「でも現代人の価値観からいえば、平氣で浮氣するような男は、生きる価値なんかないんです」

おつかねー……。関西人がよく言つ「死んだらええのに」って勢いかな。だけど、まあ、そうだよな。一股三股どころじゃないんだから。

でもなんか、話をしているうちに、少しづつ源氏物語の片鱗を思い出してきた。昔、疑問に思ったことがあるんだ。いろんな相手に魅力を感じて、衝動を抑えきれない、というのは理解できる。俺も男だし。

ただ、その人数の多さには、首を傾げざるを得ないんだよな。御簾越しに、文に焚き付けられた香の香りに惹かれて……って、それだけでそこまでするか？ いくらそういうことが認められてた時代とはいえ、大変なエネルギーだぞ。

俺が思うに、光源氏は病氣だったんじゃないのかな。多情症とかそんな精神疾患、ありそつじやない？

作者の紫式部は、そんなひとが身近にいたんじゃないのかな。そのひとをモチールした可能性はある気がするなあ。

「でも、何度読んでも、よくわからないんです。その時代に生まれて、その時代の文化の中で育つて、読んでみたかった物語ですね」

なんか、気合いのはいった意見だ。そういうや鶴は、酔っぱらつて歴女になるんだった。源氏物語も歴女の守備範囲なのかな。

「俺も、それに真剣だったという意見は納得できるよ。男は馬鹿だから、その時々に夢中になつて、他のことは忘れてしまつし」

「ねえ、W松浦で揃えてきましたか」

さくらの台詞に、みんな吹き出した。俺と轟は苗字が同じ松浦だから、こんな指摘になるわけだ。

「でもやっぱり、藤壺じゃないかな。罪を背負つてでも望んだのは、藤壺だけみたいだし」

「とにかく、藤壺を選ぶとマザコンですね」

「まあ？ 藤壺を選ぶとマザコンなの？」

「当然です」

「紫を選んでたら、なんて言われてたの？」

「……………」

なんじゅそりや。

「…………源氏物語についての討論だよね？ これ」

「副部長がマザコンかロリコンか、調査してたに決まってるじゃな
いですか」

なにを今更、と続いたそぐらの言葉に、俺は後輩たちにからかわ
れていたのだと気がついた。

「やられた」

「めかみを抑える俺に、亜衣が笑いながら訊いてきた。

「……で、小学生の許嫁がいるって、本当なんですか？」

「……なんでそれを……？」

「さつき部長さん」「そんな話をしたんだしょ？ 「伝言ゲームみ
たいに回っていましたよ」

「うーん……。部屋も広くはないし、声も絞つてなかつたから、当
然と言えば当然か。しかしこの話、ここにいる写真部全員に知れ渡
つたところとか。頭が痛いよ。

「わたし、副部長さんは柚希が本命かと思つたんですけど……」

「亜衣ちゃん、君ねえ……」

「わたしも。瀬戸さんが副部長のモデルするって訊いたときは、てきつ口説を落とす魂胆かと思つたもん」

「セベリヤンまで、なに書つてるんだよ」

柚希にモーテルを頼んだときは、もう柚希が男だとわかつていたから、そんな下心は毛頭ありませんでした！

「あたしも思つた」

とじめは鶴か。『ブルータス、お前もか』と呟いたジュリアスシーザーの気持ちが、いまよづやくわかったよ。

「鶴さんまで……」

がつくり脱力してるのは、俺じゃなくて柚希だ。

「でもあたし、訊いたことあつたでしょ。副部長とつきあつてるの？ つて」

「事実無根なんですから、忘れてください」

「一時、つのブログでも話題になつてたんですよ」

「亜衣ちゃんのブログに？ なんて？」

俺の問いかけに、心底愉しそうな様子の亜衣が説明してくれた。

「柚希がうちのブログにコメント書き込むとき、ハンドルネームが

『コズ』なんで、読むひとが読んだらすぐわかるんです。で、『写真部の先輩とふたりでカラオケに行つた』って書いたことがあって、みんなが推察してたんです。柚希の『データの相手は誰だろ?』って

「す、」ーー。瀬戸さん、やつぱり人気あるんだ

「碧ちゃん、怒るか妬くかしてください。無邪氣に喜んでないで……

「なんで? モテるのカッコイイじゃん。それに、カラオケ行つたデータの相手、副部長でしょ。そのときモデル引き受けることになつた、って言つてたじゃない。怒つたり妬いたりするようなことなの?」

「……」
「……」

柚希が溜め息をついた。

亜衣やさくらに同じことを言われてもまるで意に介さないのに、碧の言動にだけ敏感に反応しているのは、現在このふたりがつきあつているからだ。

揉めるだけ揉めて、学祭の最終日にまとまつたから、まだつきあい始めて一週間の初々しいカップルである。どう見ても男女交際してるように絵柄には見えないけど。

碧に男だとばれてひと悶着の後、つきあいつになつてから、柚希は自分の性別を周囲に隠していない。だから、写真部の部員は全員、柚希が男だといつことも碧とつきあつていてることも知っている。柚希と碧のこんなやつとりも、珍しい光景ではなかつた。さくらの弁を借りるなら、世にも面白いカップルだ。

「副部長、マザコンはともかく、小学生は犯罪ですよ。ヘンタイで

すよ。人間失格ですよ。もう一十歳過ぎてるんですから、事件になつたら全国に名前が公表されますよ」

セベリヤとモジモジ、刃物のように鋭い口調を出す。

「…………肝に銘じるよ」

「松浦さん、熟女好きは個人の嗜好ですから、不倫は犯罪ですよ」

柚希はとモジモジ、…………以下同文。

「…………重ねて肝に銘じるよ」

家ではお袋にホモや不能の疑いをかけられ、コンパでは後輩にマザコソのお墨付きを頂戴し、口コソコソや不倫は犯罪だと釘を刺された。

「…………なんて一日だ。

第五話 婚約解消を申告する

「母さん」

翌日、俺はお袋の顔を見るなり、眉を吊り上げた。

昨夜遅く帰ったときには、家族はみんな寝静まっていたし、朝、遅く起きたら親父と雄介はすでに出かけていた。

そんなわけで、俺の憤りの矛先はひたすらお袋だ。

「昨日の変な話は、冗談なんだろうね」

朝飯が昼飯がわからないような食事をかきこみながら、俺はお袋に抗議する。食べながらでは迫力はないが。

どうでもこいけど、この味噌汁、熱すぎるとて。

「冗談なわけないじゃない。本当に」

「そんなあつやつ言われて……」

「母さんだって、あんたと凜ちゃんが本当に結婚できるなんて思つてないわよ。でも、向こうの気持ちもわかるしねえ」

「ちよつと待つて。じゃあ、許嫁の話を持つて来たのは、向こうの親なの?」

「やうやく

「なんでもまた?」

「事情があるのよ。うちも、老い先短い身の上なんだから、安心したいのは一緒に」

そこまで年寄りじやねーだろーが。

都合がいい時だけ老け込んだり居するよな、このひと。

それにしても、凜の親は、なんだつて近所の大学生と自分の娘を婚約させようなんて思ったのかな？

凜が俺と結婚したい、とでも言ひたのかな。いや、絶対違うな。会つことも少ないし、昨日だって普通だつたぞ。

俺より雄介の方がまだ……あ、そうか。雄介がいるじゃないか。

「母さん、俺じゃなくて雄介の方がいいじゃん。年も少しほ近くなるし、勉強みてあげたりしてるんだろ？ 俺みつよつぱい、凜ちゃんだつて懷いてるんじゃないの？」

「雄介じや、意味ないわよ。あんたじゃないと」

なんだ？

このあとなんどかその疑問をぶつけてみたが、お袋はばくらかすばかりで、答えようとしなかった。

「とにかく、結婚相手は自分で探すから、ちやんと断つてよ。凜ちゃんだつて可哀想だろ」

「彼女、いないんでしょ」

「彼女はいなくても、好きな相手は……」

「このの？」

「いなこなび、いなこと言えれば、話は戻つてしまつむなあ。

「このこの」

「信じられないわ。家に連れて来たら信じるかもしれないけど

適当に書つたと、薄々気づいたらしい。やはり鋭い。

「まあ、いこじやない。凜だけやんまだ若いんだし、いますぐじつこ
うなんて話じやないんだから。『休めみたい』もんだと思ひなさい
よ」

「氣休めとこづよつ、氣苦労でしかないんだけど……。だいたい、
若こと言える年齢にすら達してないんだぞ、凜は。

変な婚約話は、どう転がしても暗礁に乗り上げてしまつたようだ。

「「」馳走様」

俺は溜め息をつくと、ねばねば話をするのを諦めて、自分の部屋へ
戻つた。

部屋のベッドに腰かけて、俺は溜め息をついた。

「どうもわからないことだらけだ。」

だが、どうやらお袋は、なにがなんでも婚約…といった意気込みはなさそうだ。ならば、放つておいても問題はないのかな。

俺はカメラケースからカメラを取り出した。

大学に入つてから購入した一眼レフだ。デジタルカメラはどんどん性能がよくなつていくが、いまの俺にはこのカメラで充分だ。

最近、まともな写真を撮つてなかつた。カメラの電源を入れて、再生モードを起動する。液晶に表示された写真はどれも、学祭を撮影した記念写真だ。気持ちが入つてない写真だから、パソコンに転送もしないでそのままにしていたのだけど……。

俺はノートパソコンを立ちあげた。とりあえずデータを転送して、メモリを空にしておくことにした。

写真を撮りたい気持ちはある。

けれどいまは、心を揺さぶられる被写体に巡り合えない。

柚希を写したときは、心地よく高揚した。そして満足できるものが撮れた。いまは潮が引いたみたいに、空虚な気分だ。

「才能、ないんだろうなあ……」

写したい被写体が絞りきれないのも、方向を見極められない原因だ。人物、風景……、なにが自分を一番惹きつけるのか、いまだにわからないのが、もどかしい。

撮つても、撮つても目標が定まらないことこそ、才能がない証拠

のようと思える。

佐々木や碧はちゃんと絞っているのが、少し悔しい。

写真に限らず、なにをしてもある程度のレベルには達するが、際立つて才能を發揮することはない。

勉強も運動も、苦労せずに及第点は取れるが、一番にはなれなかつた。

自分で自分が物足りない。

爆発力は、どうすれば身に付くんだろう。

ふいに机の上に置いていた携帯の、着信音が鳴った。

開くと表示されている名前は、高校時代の友人、林原だ。

「林原？」

『よお、元氣か？』

「先週、会つたばかりだろ」

『そつだつたよな。M大祭、お疲れさん』

林原と最後に会つたのは、学祭だった。林原は、M大から車で二十分くらい離れたところにある美大で、油絵を専攻している。俺たちの高校から美大に行くのは十年にひとり、いるかいないかの変わり種だ。

「いや、こちらこそ、来てくれてサンキュー」

『評判の名画は見逃せなかつたからな。結構な人数引きつれて行つちまつて、迷惑かけなかつたかな』

「全然。佐々木はお前が美大の油彩専攻だつて訊いて、恐縮してたけどな」

『ああ、あの、ゴツくて可愛い撮り鉄くんか。名画の責任者だったつけ?』

佐々木は鉄道マニアの撮り鉄だ。写真展の作品も電車の写真だから、林原にはそういう説明した。それを覚えていたらしい。

「そうだけど、佐々木って可愛いか?」

『可愛いだろ。お前の言ひこと、なんでも鵜呑みにしそうじゃないか』

「そりや、後輩だからな」

『いまだき、サークルの後輩が、そういう上級生の言ひこと訊いたりしないぞ』

へえ、そーカナ。美大生はアクが強いだけじゃないのかな。

「それより、なんか用事だつた?」

『ああ。実はあの作品が行き詰つてんだよ。今夜、泊まりに来てくんない?』

なんだ、そういうことか。

林原はいま、なんとかいう展覧会に向けて、油絵を制作中なのだが、俺がその絵のモデルになつてているのだ。

「いいよ」

『悪いな。何時くらいに来れる?』

「そうだな。七時でいいか?」

『オッケー、助かるよ。じゃ、待ってるから』

携帯を切つて、俺はパソコンの画面に視線を戻した。たいした数でもなかつた画像は、とっくに取り込み作業が終わっていた。

林原の絵は、あれからどんな変化を遂げているのだらう。
俺は、少しばかり浮足立つた。

第六話

美大の友人 1（後書き）

築何十年だかは不明だが、いまどき、映画でも見かけないような昭和の木造住宅。そこは代々男子美大生がルームシェアしている広い敷地の一軒家だ。

雨戸が木製の引き戸だつたり、縁側があつたり、渡り廊下があつたり、洗面所がタイル貼りだつたり、俺たちの世代には、この家のそこかしこがカルチャーショックだ。

いろんな時代に何度もリフォームしたのか、部分的に現代的な所もあつて、家自体がパツチワーケのようだ。土間まであるから、最初に建てられたのは戦前なんぢやないのかな。

子どもの頃から住み慣れた家は、シンクに食洗機が備わつていて、床暖房があり、窓はペアガラスだ。

祖父母の家も似たようなものだから、こんな古い木造住宅を体験したことがない。なのにどうして、懐かしいと思うのだろう。

そして俺は、なぜかこの家が妙に気に入っている。

林原のモデルを引き受けたのも、半分はこの家が目当てだった。ここに来るときは、必ずカメラを持参するのだから、我ながら正直すぎで呆れる。

ルームシェアは、それぞれ専攻で部屋が割り振られている。

一階は林原と日本画。二階は彫刻がひとりどデザインがふたりだ。油絵と日本画は部屋で絵を描くから、でかいキャンバスを二階に運べないので。

林原の部屋のふすまを開けた途端、テレピンオイルの匂いに蒸せそうになつた。

石油ストーブで部屋が暖まつてゐるから、余計に匂いが強烈なよ

うだ。

「よお、急に無理いつて、悪かつたな」

「家にいても退屈だから、いいよ」

林原の油絵は、最後に見たときより、かなり進んでいた。俺には、その絵がなぜ行き詰っているのか、そろばんりわからぬ。

「もう、完成じゃないのか?」

「まだだよ。弾けた感覚がないから」

林原はよく、こんなことを言つ。絵の具を重ねて重ねて、仕上がりはいくんだけど、むちや露がかかっているときはまだ、筆を置けないそうだ。あるとき突然、頭の中で弾けたような感覚が起こつて、そこから急に自分の表現したかった絵が、形になつていいくのだという。

[写真は、シャッターを押せばそれ以上できる]とはない。シャッターを押すまでの知識と感性がモノを言つ。

俺には絵心がないから、林原の言つてることだが、すべては理解できないけど、妙に羨ましい気分になる。

「すぐ描き始める?」

絵の中の俺は、上半身裸で背中を向けている。すぐ描くなら、脱がなきやいけないから訊いたのだ。

「いや。ちゅうとしてからにする

「」のちょっととしてからが、三十分のときもあれば、三時間のときもある。ならば、一時間半後に来ればよかつたんじゃないかと訊くと、筆で描いてないときも気持ちで描いているから必要な時間だそうだ。

絵と写真はまったく違うけど、そういう感覚は共感できるから、甘んじて受け入れてはいるけどさ。

いつも座る場所に胡坐を組んで腰を下ろす。

林原が淹れてくれたコーヒーを受け取った。淹れてくれたといつても、カップにインスタントコーヒーを適当に放り込んで、石油ストーブの上に乗せたやかんからお湯を注いだだけのものなんだけど。ジーンズに着古したトレーナー。そして元の色がわからないほど絵の具で汚れたエプロン。これが、この部屋で絵を描くときの、林原のスタイルだ。

高校のときは、俺と似たようなカテゴリーに入る外見だった。いや長身で細身。目立つて違反することはしないが、優等生でもない、どこにでもいる普通の高校生ってカテゴリーだ。

だが、大学に来てから林原は男臭さを増した。体型に変化はないが、攻撃的な印象になつたのかも。

俺は相変わらず守りの印象が強いんだよな。身近な友人の成長や変化は、頼もしくもあり、寂しくもある。そしてなにより、羨ましい。

しばらく、お互いの近況を報告し合っていると、ふいに林原が躊躇いがちに「あのは」と改まった口調になつた。

「こないだ、武智^{たけち}から電話がかかってきた」

武智も林原同様、高校の同級生だ。高校時代は三人でよくつるんでいたが、武智は地方の大学に進学したので、最近は疎遠になつて

いた。

「へえ、あいつ、元氣にしてた?」

「元氣は元氣だったけど、大学、中退したって」

「ええ? なんで?」

あと一年ちよつとで卒業できるのに、ビリしたんだり。

「あのや、いれは武智からお前に話してくれって頼まれたんだけど

……」

林原は言いつぶやく葉を詰まらせると、煙草に火を点けた。

「……驚くなよ」

「なんだよ」

「武智、性同一性障害だったんだって」

「は?」

「家族と縁切られて、いま女装して、その手の店で働いてるやつだ」

「……」

俺は言葉を失った。

ストーブの上のやかんが、しゅんしゅんと音を立てていた。林原が吐く煙草の煙が揺れるのを見て、はつと我に返った。

「……で、でも、でもあいつ、そんなそぶり、全然なかつたぞ。むしろ、俺らより男らしかつたじゃないか」

どうにか、気を取り直して疑問をぶつける。林原の口調からは冗談とも思えなかつた。それでも、冗談だと笑い飛ばしてほしい気持ちでいっぱいだつた。

「うん。でも、高校のとき、男としてふるまつのが辛かつたつて」

そうだつたのか。全然、気がつかなかつた。

運動神経が良くて、体格も男らしいやつだったけど……。でも考えたら、武智は誰ともつきあつたことなかつたし、その手の話に混ざることもなかつたな。

硬派だと女の子からモテてたのに、なんで、ビリして、と頭の中がグルグルする。

俺は頭を搔き鳴つて、ぬるくなつたコーヒーを喉に流し込んだ。こんなときは、酒でも飲みたいよ。でもこのあと、モテルのお勤めがあるしなあ。

正直、武智が女装しても全然似合わない。不気味になるばかりだら、俺は溜め息をついて肩を落とした。

「あいつ、本当にお前に訊いてもらいたかつたみたいなんだよ」

俺もそれは疑問だ。武智は林原よりむしろ、俺と氣が合つてたはずなのに。

「惣介は頭が固いから、言いだせなかつたみたいだぜ」

「う～ん、俺つて頭、固いかな？」

「やうだな。なんていうか、まっすぐだ。常識的だし」

「でもまあ、俺より林原の方が告白しやすかったなんなら、そうかな」

「

林原はおおらかだ。

美大に行ってるだけあって、柔軟性に富んでるし。なんでも受け止めてくれそうな、度量の広さを感じるよ。大雑把ともいいうけど。だけど俺だって、高校時代の友人からカミングアウトされたからって、「うわ、気持ち悪い」なんてことを思うつもりは、毛頭ないんだけどな。理解はできなくても、話を訊いてやって、励ますくらいならできるの」。

「林原が訊いてやったんなら、それでいいさ。武智、どんな感じだった？」

「やつと楽になつたつて言つてたよ」

「そりゃ、なう、よかつた。あいつもこれからが大変だろうな。しかし、案外多いんだな」

「なにが？」

「性同一性障害。写真部の後輩にもひとりいるんだよ」

「マジで？」

「うん」

「もしかして、あいつか？　名画の責任者の……？」

「佐々木じゃないよ」

武智とイメージが重なるから、そう思ったのかな。武智は佐々木ほど感じがないのに。

「毎日、女装して大学来てる」

「すうじいな。問題とか起きないわけ？」

「うん。ていうか、女にしか見えないんだよ、その子の場合」

「へえ。じゃあ、手術済みとか？」

「手術はしていない。夏に話したときは、来年、手術して戸籍も変更するって言つてたけど、やめるみたいだ」

「なんで？」

「彼女ができたから」

「は？　性同一性障害で、女装してて、彼女できんの？」

林原は短くなつた煙草を灰皿に押し付けると、驚いた声をあげた。

「相当、すつたもんだしてたけどな」

「やつややうだら。しかし、そんなやうに彼女ができる
なんで俺こな回つてこなこんだよ」

嘆く気持ちはわからぬくない。俺も最近はシングルだし。

「なあ、女にしか見えないって、どんな感じ？」

「どんなど訊かれても、難しいな。あ、お前、見たことあるよ」

「こいつ？ 学祭？」

「ああ」

頷く俺に、林原は首を傾げた。

「俺、写真部の部員、紹介してもらつたの、あいつだけだぞ」

「直接会つたんじやないよ。写真展、来ただろ」

「そりややうにね」

「俺の写真、覚えてる？」

「やつややうやう……お、お、まあか……？」

「あの写真のモテルが、その子だよ」

「マジかよ、あつえねえつて」

林原は田を丸くして呆然としている。

「だよな。俺もまだ、たまに混乱してるよ」

「ひつあつプロのモデルか、グラビアアイドルかと思つた」

「学生がどうやってプロのモデルを雇えるんだよ」

俺は苦笑して肩を竦めた。

「あれだけ可愛い子をあんな風に『』して、惚れてしまいそうにならないのか？」

「可愛くても男だぞ。どうやって惚れるんだ？」

「惣介、お前、本当にまっすぐだな。潔癖症か？」

「なに言つてるんだよ。普通だろ」

「うーん、あ、そうだ。日本画の女子が話したことでためしてやるよ」

「なにそれ？」

「もし世界に人間が自分を含めて三人だけだったら、といつ過程なんだ」

「ふうん。女の子が好きそうな話だな」

「ひとりは醜い老女。もうひとりは美少年。どちらかを恋愛相手に

選ばなきゃ死ぬとしたら、どうひを選ぶ？

「？ 老女だろ？ 美少年を選ぶ奴なんかいるのか？」

「オレは美少年だぞ」

「ええ？ なんで？ 友達ならわかるけど、恋愛相手だろ？」

恋愛の対象を選ぶなら、年齢や容姿や性格以前に、まずは女でなければ話にならないではないか。もちろん、世の中に同性愛者がいることは知っているが、それは「よく稀な人たちだけのことであって、俺らみたいな人間とは、縁のない話だと思つていた。

「オレは綺麗な方がいい。ちなみに、日本画の女子でこの質問をしたんだって。老女を老人に、美少年を美少女に替えて。そしたら、美少女を選ぶ子の方が、はるかに多かつたらしいぞ」

「マジで？ あ、でも、美大だからじゃないの？」

美を追求する学生なら、美しさに比重を置くのかな。

「日本画の女子は、美大の中でも、かなりまともなんだぞ」

じゃあ他の専攻はどうなんだよ、怖ろしいな。

「でもそつ思つなら、経済学部で訊いてみる」

「全員、俺と同じだと思つけどな……」

「どうかな～。あとと、そろそろ、描いてもいいか？」

「俺はいつでもいいぞ」

「じゃ、脱いで」

「襲うなよ」

さつきまでの話が話なので、俺はふざけて言つた。

「もうちょっと美少年だったらよかつたんだけど、惜しいな」

林原もノリがいい。

「失礼だな。俺のどこが美少年じゃないんだよ」

切り返しながらも、可笑しくて笑いが止まらない。

「惣介は美少年というより、好青年だから、色気はないんだよな」

林原は小首を傾げながら、ぼそりと呟いた。

不本意だと文句を言いながら、このセリフを篠崎部長や佐々木が訊いたら、大笑いしながら頷くんじゃないかと思えて、ちょっと虚しかつた。

一端、キャンバスに向かうと、林原の集中力は半端じゃなかつた。ひどが変わつたように真剣な表情になる。

絵はすでに、かなり描き込んであるので、モデルといつても最初の頃のような、長い時間動けないわけではなく、イメージを再確認しているようだつた。

しばらく俺の背中を睨みつけていたかと思うと、キャンバスに向かつて唸つてみたりする。なかなか筆は進まないようだつた。

そんなことを繰り返しているうち、林原は、突然描き始めた。モデルは休憩していい、しばらくしたらまた頼むと言われたから、俺は服を着て、絵の後ろに回つた。

林原の絵は、具象とも抽象ともいえるような、曖昧な表現だ。だからこそ、描いている最中なのに、モデルを続ける必要がないのだろう。

絵の良し悪しはわからないから、口は出さない。

だけど、煙草をくわえながら筆を持つ横顔は、俺が知る林原の姿の中で、一番輝いている顔だ。

俺は、持つて来たカメラで、その姿を収めた。

集中した林原が、シャッター音に反応しないのは、いつものことだつた。この家が火事になつても気がつかないのでないか、と思うような情熱だ。

俺にはないのは、こんな激しさなんだろうな。男として、置いて行かれているような寂しさを感じた。

武智はどうだつたんだろう。

俺や林原と一緒にいて、疎外感を味わつてきたんだろうか。

俺は、高校時代の精悍だつた武智を思い出した。もう一度と、あの姿で会えることはないのかな。

そう思つと、大切な友人をひとり失つたよつた寂寥感が込み上げた。

第八話 写真部の非凡なる後輩たち

ゼミが終わって部室に行くと、最近おなじみのメンバーが机を囲んでいた。

佐々木や鶴、それに柚希は、もともと写真部の活動も熱心だったけど、さくらはこのところ、意外に頑張っている。

さくらは去年、学祭の名画を手伝っているうちに写真部に入部したのだが、そのあとはコンパくらいにしか顔を出していなかつた。今年は個人写真も出品したし、ちょっととやる気になってるのかな。

「うわっ、副部長、なんか顔、汚くないですか？」

さくらは容赦のない指摘をされて、俺は自分の顔をなでた。口の上と頬に少しづついた感触がある。

「そういや、三田…いや、四田へりい、髭、剃つてないな」

「やだな。横着しないでくださいよ。似合わないんだから」

無精ひげが似合う奴なんか……いるか。林原なんかちょっとそんな感じだし、佐々木も似合ってそうだな。でも、佐々木が髭を伸ばしたら、おっさんになりそうだ。

俺はもともと髭が薄いから、毎日剃つたりはしないんだけど、さすがに四田田になると目立つてくるか。

「昨日は友達の家に泊まつたから、剃れなかつたんだよ

「部長のアパートつすか？」

佐々木の問いに、俺は首を振った。

「いや、美大の友達。ああ、そうだ。佐々木によろしくって言つてたや。あいつ、お前のこと、気に入つたみたいだな」

「油絵の林原さん？」

「ああ

「泊まりにいったりする毗ひ、仲良かつたんすか？」

「高校の同級生だからな。でも昨日は遊びに行つたんじゃなくで、絵のモデルに行つたんだ」

「へー。松浦さんがモデル……。想像できるよつな、出来なによつな。油絵のモデルって、脱ぐんすか？」

「脱ぐよ」

「きやー、ヒローー！」

さくらがふわけてはじっこだ。この子は、いきなり反応が激しいよな。

「期待を裏切つて悪いけど、上半身だけだから」

「なんだ。つまんない」

「つまんなくて、悪かったね。林原が言つこま、俺の背中は主張し

過ぎなくて、いま描いてる絵に「うわこらこら」と

部員が一斉に、ひとつと笑つた。

そんなに面白かったか？ いまの。

「ほんにちま。あ、なんか盛り上がつてゐる」

ノックの音と共に、部室のドアから入ってきたのは畠衣だ。最近よく、写真部の部室を訪れる。

せくらと顎は、いつそのこと写真部に入つたらいにの、と説得しているようだが、写真は携帯でしか撮らないからと、入部は断つている。

「こつもお邪魔してるので、お菓子持つてきました」

見れば、畠衣の手には紙袋があった。

「畠衣ちゃんの手作りクッキー？」

畠衣が尋ねると、畠衣は驚いたよつに頷いた。

「どうしてわかるんですか？」

「昨日、畠衣ちゃんのブログに、最近お菓子作りにはまつてゐ、つて書いてあつたし。クッキーを試行錯誤中なんでしょう？」

「そりなんです。ブログってやりだすと愉しいんですけど、私生活がバレバレになりますね」

さくらと碧がお茶の準備を始めた。最近、写真部の部室は、こんな感じで穏やかだ。めぼしい活動予定もないから、休息中だな。

[写真部の部室は、広さが一十畳くらいだろうか。壁のコルクボードには、部員が撮った写真が重なり合つよう貼りつけてある。

奥まつた一角が暗室になつていて、白黒のフィルム写真を現像することができる。水道もあって、何年か前の卒業生が湯沸かしポットを置いていたので、部室とは名ばかりのお茶会ルームのような場所になつていた。

もともと、写真を撮るときに部室で撮ることは稀だし、佐々木や碧は鉄道だの景色を撮るから、本当に活動しているときは外に出て行つてゐる。

ここに集まつているときは、情報交換だつたり充電してるときだから、この状況も当然ではあるのだ。

「」の部室が写真部らしく活氣で溢れるのは、学祭の準備のときくらいだ。

「さつき、なんか盛り上がつてました？」

「そつなの。訊いてよ、畠衣ちゃん。副部長がね、ヌードモデルしてるんだって」

「ええ？ す」「……んですか、それ？」

「あくびちゃんと君の言葉じや説明不足だ。美大の友達に頼まれてモデルになつてるんだよ」

「ああ、そつだつたんですか」

「副部長の背中が頼りなくて、ちよつといいんだって」

「頼りなくて、なんて言われてないって。主張し過ぎなくて、だよ」

「どうでも一緒にやん」

さくらがほそと咳くと、また一斉に笑い転げた。ビーチもないから、笑われてばかりだ。

「でも、副部長さうって、脱いでもあまり色氣とかなれりですよね」

「男に色氣なんかあるの?..」

「ありますよ。もちろん」

「うーん、そういうえば、林原にも言わたよ。『惣介は美少年と言つより好青年だから、色氣はない』って」

「完璧な表現ですね。さすが美大生」

部員全員に大きく頷かれて、さすがに俺は落ち込みそうになつた。

第八話

写真部の非凡なる後輩たち（後書き）

正直、毎日の更新が苦しめです。

話もそうなんですけど、サブタイトルが（笑）

このシーンは、まだ途中なので、明日も更新します。

第九話 碧の胸の触り心地

「色気云々でこうと、この中じゃ碧だよね」

「あ、納得です」

「あたし? なんで?」

さくらの意見に畠衣が同意するのを見て、碧自身、驚いていたが、俺もびっくりした。いまいの女の子の中では、一番、幼いイメージがあるからだ。

佐々木も腑に落ちない様子で、クッキーを齧りながら首を傾げている。

「胸がそそるんだよね、碧って

「わかります~」

「見たことあるの?」

「泊まりに来てもうつたとき、下着姿を披露してもらいました

柚希が「コーヒーを吹き出しそうになつて咳き込んだ。

「瀬戸さん、大丈夫?」

碧が驚いて柚希に顔を寄せていく。柚希がどうして吹き出したか、わかつてないんだろうな、あれは。

碧はちやんと言われないとわからないタイプだし、柚希は聞いたことも言わずに飲み込んでしまう性格だ。このふたり、冷静に考えると相性悪いんじゃないのか？

「はい、一応……」

しかし、柚希も案外余裕がないな。恋人が同性の後輩の家に泊まりに行つたり下着姿を見せるくらい、どうつてことないと思つんだけど。

「触つたことがある？」

「いえ、それはさすがに

もうううと亜衣は、柚希の挙動不審な様子なんか、気にもしないらしく。

「触つてみて、触つてみて」

「碧先輩、触つてもいいですか？」

「べつに、いいけど……」

碧の隣で、柚希が複雑きわまりない顔をしている。もし俺が碧の彼氏だったとしても、この状況に置かれたらこんな顔をするしかないんだろうな。

「うわあ、ほんとだ。なんか凄く色っぽい触り心地」

「でしょ」

さくらが自分の胸のよつに、血漫げに頷いている。

「ええ？ なんで？ みんなと違うの、あたし？」

「違いますよ。ほら」

亜衣が碧の手を取つて自分の胸に触らせた。高校のときはクラスの女子がよくこんなことしてたけど、間近で見るのは初めてだ。俺も佐々木も、眼中にないか、男としてカウントされてないんだろうか。

「亜衣ちゃんの方が大きいし、色氣あるよ」

「大きさじゃなくて触り心地だよ。わたしと碧の方がわかるのかな」
さくらが亜衣と交代した。碧は自分とさくらを触り比べて首を傾げている。

ふと佐々木に視線を移すと、時刻表を顔の前で握りしめて黙り込んでいた。どんな顔をしているのかは時刻表で隠れて見えないけど、耳が真っ赤になっていた。

そういうえばこいつは、高校が男子校だったつけ。こんな女の子の戯れ程度でも、興奮したりするんだろ？ が。ゴツイ身体に似合わず純情なやつだ。

「うーん、違うけど、单なる個人差じゃないの？」

碧はまだ首を傾げていた。

「自分じゃわかんないのかな。ね、瀬戸さん、違うよね」

セベラが柚希の両手を取つて、自分と麗の胸に押し当たった。

「あ

「あ

「あ

部室に一瞬、なんとも言えない沈黙が流れた。

「！」小畠さん……なにするんですかっ！

慌てて手を引いた柚希が、激しく動搖している。普段あまり取り乱したりしないから、こんな様子は珍しい。

「……あ、いま、ガチで忘れてた。『めん、『めん』

さくらが舌を出して謝罪しているけど、なぜか反省しているようには見えない。

俺は思わず派手に吹き出した。

「松浦さんっ」

柚希が唇を尖らせて睨みつけてくるけど、でもちょっと笑えるよなあ。普通の男だったらラッキーって感じだけど、柚希には違うみたいだ。

「悪い、悪い。でもなんていうか…大変だな。同情するよ

性別を忘れられるとは、面白すぎる。腹が痛いよ。

柚希は、まだにか言ったそつこむくられた顔を向けてくる。男とわかついても、こんな表情をすると、やつぱり可愛こと思つてしまふもんだな。

「あの…すいません、碧さん……」

柚希が碧に頭を下げている。不可抗力とはいえ、彼女の目の前で、他の女の子の胸に触つてしまつたからだらうけど、真面目だ。

「大丈夫？ セクハラされたんだから、ちやんとむくらひ怒つた方がいいよ」

「はあ……。あの、碧さん、怒つてません？」

「なんであたしが瀬戸さんに怒るの？」

「いえ、なんでもないです……」

「」のふたりは恋人同士なんだよな。妙に会話がちぐはぐなんだけど、柚希が性同一性障害だつたからなのか、碧の破天荒な個性に起因しているのか、どっちなんだろう。

「ほんと、『めんつて。つつきしてた』

自分のせいでとはいえ、胸に触られた女の子が触つた男に謝罪するのも珍しい。

「あくらさん。しょうがないですよ。柚希のこの有り様じや、忘れます」

亜衣が涙を流さんばかりに笑いながら、さくらりとフォローする。

「そうだよねえ」

「みんなはまだ短いからいいけど、わたしなんか六年も柚希を女として扱つてましたから、今更、性転換されても……って感じですよ」

性転換つて、亜衣からしたら、柚希が手術を踏みとどまつたのは、性転換になるのか？ なんかややこしいな。

俺は、柚希の顔を見つめた。

存在そのものが神秘的つて感じなんだけど、話してみれば、わりと普通で、むしろ地味な性格の大学生だつたりする。ただ、中学の時に性同一性障害と診断されたのに、女の子と恋愛して、それでも見た目が男っぽくならないのは、どうなつてるんだろう、とは思う。女装に関しては、恋人の碧が「せっかく可愛いんだから」と推奨しているらしいのだが……。

武智もこんな外見に生まれてくれば、苦労することもなかつたのかな。

うーん、普通の俺には、普通じゃない人たちの平和がどこにあるのかなんて、わかるはずもないか。

「松浦さん？」

あんまりじろじろ見ていたら、柚希が不審そりこしていた。

「いや、俺つて、まつすぐで常識的かな？」

「は？」

「昨日友人にそう言われたのを思い出したんだ」

「松浦さんは、まっすぐで常識的だと思いますよ。なにか疑問の余地もあるんですか？」

「なんかさ、世界にもし、自分を含めて三人しかいなかつたら……つて過程の話なんだって」

俺は昨日、林原から訊いたことを、みんなに話した。

「そんな選択で迷うひといるの？」

セベラが首を傾げた。

「美少女だよね」

「ですよね」

セベラと畠衣が顔を合つた。

「ええ？ 本当に？」

「副部長、まさか醜い老女なんですか？」

「いやだって、そりやあ……あ、畠衣ちゃんは？」

「美少女です」

「うーん……いや待て。碧は柚希を女だと思っていたときから不穏

な恋心を抱いていたから、参考にはならないんだ。

「佐々木は？」

「そうですねー。難しいですけど、じつちかと言えば、老女……かなあ」

そんなに説むことなのか？ 佐々木でも？

「副部長、筋金入りのマザコンですね」

「老女も熟女に入るの？」

「熟女の賞味期限って、何歳までなんですか？」

「へへりと腰と腰衣の追いつめこ、俺は飛び出しちゃひになつた。

俺の方が普通じゃないのかーっ！」

第九話 碧の胸の触り心地（後書き）

皆既月食のため、遅い時間の更新です。9時半くらいまでは雨が降つてたんですが、11時前に晴れて赤い月を見られました。いかがわしいサブタイトルになってしましましたが、コメティ一度の高いお話だと思ってます。私的には、部室の話は楽しんで書いてます。恋を感じるときはシリアルスだったのに、同じメンバーでコメディーを書く暴挙ですが（笑）

第十話 凜を迎えて、それから……

「ただいまー」

その日、俺が帰宅したのは、夜七時半を過ぎた頃だった。

「惣介、いいときに帰つててくれたわ。いまから車で文化会館に行つてきて」

お袋がパタパタと玄関に出てきた。

「文化会館？ 図書館の隣の？」

「やあ、やあ」

「なんで？」

「庄野さん、仕事が終われないらしいの。凜ちゃん、大人が迎えに行かないと帰れないのよ」

「なんかよくわからないけど、文化会館に凜ちゃんを迎えて行けばいいんだな」

「そうなの。お願い」

「わかった。行ってくる」

「あ、ちょっと待つて」

お袋は慌ててコビングに引き返すと、小さなメモを手に突っついた。

「これ、凛ちゃんがいま持つてる携帯の番号。もし、会館まで行って見つからなかつたら、電話してみて」

「わかつた」

メモを受け取つて、俺は玄関のドアノブに手をかけた。

「安全運転で帰つてきてよ」

「わかつてゐつて

お袋の心配性も久しづりだな。よその子どもを車に乗せて帰るんだから、無理もないか。

俺は苦笑してポケットから車のキーを取り出した。

文化会館の駐車場に車を停めて、会館の入り口の前まで来ると、凛が俺に気がついて駆け寄ってきた。

「惣介くん」

嬉しそうな笑顔で首に飛びついてくる。

「来てくれてありがとう」

「俺が来るの、わかつてたの？」

「おばさんから電話してもらつたから」

ジャージ姿の凜は、見慣れない髪型をしていた。

括っているわけでもないし、どうなつているんだろう。毛先が全然見えない。いつもは額に下りている前髪も上がつてゐるし。おでこが見えている顔もなんだか新鮮で、思わず見入つた。

文化会館のホールに、凜と同じような髪型の女の子が何人かいるのが見えた。

体操やシンクロの女子選手が、こんなべたりした髪型でいるのを、テレビで見た気がするけど……。

「凜ちゃん、今日のこれ、なんなの？」

「月曜日と木曜日はバレエだよ」

習い事の迎えに来たのか、俺は。お袋は最低限の説明すらしていくなかつたんだな。凜がバレエを廻つてゐるのも、初耳だぞ。

「先生と友達に挨拶していく」

「凜ちゃん、俺も行くよ」

別に凜が言えば必要ないとthoughtけど、万が一にも、怪しい若い男が教え子を連れ去つたと誤解されても困る。

俺は足早に凜の背中を追いかけた。先生とおぼしきひとの前まで行き、頭を下げる。

「いつも凜がお世話になつてます。庄野さんが来られなかつたので代わりに迎えに來ました。斜向かいに住んでる松浦です」

はすむ

「あひ、わざわざひー」寧に。凜ちゃんをよろしくお願いします。気を付けて帰つてください」

「はい。ではお先に失礼します」

バレHの先生だけあって、首やら肩が恐ろしく細いな。なに食べて生きてるんだろう。柚希や碧も瘦せてるけど、種類が違う感じだ。俺はもう一度軽く頭を下げて、凜に視線を戻した。凜はなんだかぼんやりしている。

「凜ちゃん？」

どうしたんだろ？俺は凜の頬に指を滑らせた。
弾かれたように、凜は飛び上がった。

「惣介くんっ」

「あ、ごめん。びっくりさせた？　ほひつとしてるから熱でもあるのかと思つたんだけど……」

なんか顔、ちょっと赤いかな。

「大丈夫？」

額に手のひらを当ててみると、熱はないみたいだな。顔が赤いのは、練習の後だからかな。

「だ、大丈夫だから。本当になんでもないから」

凜の顔は、また赤くなつたみたいだつた。

逃げ出すように先を歩く凜の後ろ姿を、俺はぼんやり眺めた。後頭部で丸くまとめた黒髪が可愛かつた。駐車場の頼りない外灯に照らされたうなじが、やけに女らしく田に移つた。

助手席に座つた凜は、少しうなだれてぼそつと呟いた。

「「めんなさい」

「え？」

「せっかく迎えに来てもらつたのに、なんか……」

さつき振り払つよつた態度を取つたことを、気にしているのだろうか。

「なんとも思つてないよ」

「ほんと?」

「本当だよ。それより、いつもこんな時間までバレエの練習、あるの?」

「うん。それに来月、発表会だから」

「なにか踊るの?」

「中国」

「中国？」

「くぬみ割り人形の中国」

「やうか。大変なんだね」

ぐるみ割り人形の中国と訊いても、なんのことやらせりぱりわからなかつた。大学生でも小学生よりわからないことがあるんだな。あたりまえか。

しばらく車を走らせる、大通りに面した信号に引っかかつた。間が悪い。この信号、長いんだよな。うんざりした気分を持て余し、隣に視線を移した。

凜は靴を脱いだ片足を座席に乗せあげて、つま先を触っていた。バレエのタイツは、履いたまま爪先の部分だけ出せるようになつているらしい。以前つきあつていた彼女が履いてたパンストなんかとは、ずいぶん形状が違うようだ。

なにをしているんだろうと見つめいたら、足の指は白いテープまみれだつた。凜はそのテープを外そうとしていた。

「凜ちゃん？」

「え？ あ、あの、『』は持つて帰るよ。車、汚したりしないから

「やうじやなくて、怪我してるのか？」

「やうじ。マメは出来かけてるけど怪我はしないよ。トウシュー
ズでマメがつぶれると痛いからテープニングしてるので」

テープリング……。なんだそうか、びっくりした。

サッカーや野球のテープリングと、似たようなものかな。とにかく、怪我じゃないならよかつた。

ほつとした心地で、凜の仕草を見守った。慣れた手つきで、足の指からテープを外していく姿に、俺は胸がざわめいた。真剣な横顔を、ジャージに包まれた華奢な身体を、バレエのタイツから露出したテープリングの足を、カメラに収めたい衝動に駆られた。

「惣介くん、信号、青だよ」

凜の声と後ろの車が鳴らすクラクションが同時に聞こえて、俺は我に返った。この信号は、こんなに短かっただろうかと、舌打ちしたい気分だった。

もつと凜を、見つめていたかった。
いま押し寄せた衝動が、大切なもののようにも、後ろめたいもののようにも思えて、俺はひどく戸惑った。

家に着くと、車の音に気付いたのか、凜の母親が慌ただしく出てきた。

「惣介くん、ごめんね。本当に助かってたわ、ありがとう。急患が入つて看護師が足りなくなつたから、凜を迎えて行く時間に帰れなくて」

「いえ、大丈夫です」

恐縮する凜の母親に、俺は訊きたいことが山程あつたけど、凜のいるところでは訊きにくいよな。こんなに近くに住んでいるのに、

会えそうで会えない人だから困る。

晩飯を済ませて風呂から上がり、首に掛けたタオルで髪を拭きながら、俺は机の上のメモ用紙を見つめた。お袋に手渡された小さなメモだ。

携帯の番号が記されている。

凜が小学生であることを考えれば、この番号の携帯が凜のものとは思えない。お袋が言つたのは『いま凜ちゃんが持つてる携帯』だった。

習い事のときだけ、だれかの携帯を借りているのかな。だれかのといつても、家族に決まっている。でも、父親にしても母親にしても、仕事をしているのに一日携帯を手放すのは不便だろう。とすると、この番号の携帯は凜のもので、普段は持ち歩かないけど、習い事のときは持つていく、と考えていいんじゃないのかな。

俺は散々迷つた挙句、メモの番号を携帯のアドレスに登録した。

「もしかしたら、またこんなことがあるかもしれないし……」

だれもいない自分の部屋で言い訳しながら、俺はなんだか、ひどく悪いことをしている気分だった。

第十話　　凜を迎えて、それから……（後書き）

心が動くときの話は、書いていて落ち着かない気持ちになります。本当はもっと書き込みたいかったのですが、恋愛度数を下げるかつたのであります。11歳の子ども相手に本気になられても……なんですが（笑）

活動報告に今後の予定を書きました。

第十一話 元カノのアパートから朝帰り

煙草の匂いで、俺は目が覚めた。

目覚めて最初に目に入った物は、元カノのアパートの天井だった。

「おはよ。起こしちゃった?」

「いや……」

俺は派手に欠伸をかましながら、首を振った。

昨夜抱いたひとが、すでに服を身に着けていたので、俺は少し寂しい気持ちになった。暖房で暖められた部屋でも、裸のままでいるのは寒い。ベッドのわきに置いてある服を拾い上げて、思い切り腕を伸ばした。背中がギクシャクする。

眠れないほど知らないベッドでもなく、ぐっすり眠れるほど慣れたベッドでもない。いま朝の挨拶をしてくれたひとに、少し似ている。

「なにか、食べる?」

「いいよ。忙しいの?」

煙草を口にくわえながら、スケッチにパステルを走らせている背中に尋ねた。

「忙しいわけじゃないんだけど、次のラフのラフかな」

春までつきあっていた彼女は、林原と同じ美大で助手をしている。

別れていた間に誕生日が過ぎたから、いま一十九だ。

一度別れて偶然再会してから、『こんな呼び出し』はたまにある。お互い、嫌いで別れたわけじゃないし、好きな相手もいないから、なんとなく、だ。おかしな関係だと思つけど。

「中江さん、彼氏、できないの？」

つきあつていたときは、八歳年上でも名前で呼び捨てにしていたが、いまは苗字で呼んでいる。そんな呼び方にも、最近は慣れてきた。

「できないわねえ。私、自分を優先しちゃうからなあ」

「そこがカッ『いいのに』。みんな見る目ないな

「よつ戻したいくらい？」

「いや、それは……」

俺は、スケッチに視線を落としたままの中江の背中に、違和感を覚えた。

「俺、もうここに来ない方がいいんじゃないの？」

「どうして？」

「俺ところな」と続けてたら、彼氏、作りこんだら

「惚介つて、優しいのか残酷なのか、わからなによつなどこ、あるよね」

残酷？ 僕が？ なんで？ 首を傾げて不思議そうな顔をしていると、中江はくすりと笑った。

「あなた、だれにでも優しいでしょ。それが恋人にとつては微妙なよ。私はもう彼女じやないから気楽に癒してもらつてるけど」
中江の言い方だと、別れた原因は俺にあるみたいだ。少なくとも、彼女はそう言いたいのかな。

「そうねえ、たとえば、私が妊娠したつて言つたら、惣介は責任とつて結婚するでしょ」

俺はぎょきょとして中江の顔を見つめた。

「馬鹿ね、たとえばよ。妊娠なんかしてないわ」

彼女がなにを言いたいのか測り兼ねたが、俺はとりあえず頷いた。

「結婚したら、浮氣もせずに一生、仲良く過ごす努力を続けそうじゃない。でもそれが私じゃなくて他の誰かでも、同じだらうなつて思うのよ。惣介の残酷さはそこかな」

俺には、中江の言葉の意味が、よくわからなかつた。普通、自分のせいで妊娠させたら結婚するだらうし、結婚したら幸せにしたいと願うものなんじやないのかな。

それのどこが残酷なのだらう。

そんなことを言ひだしたら、世の中のできちやつた結婚は、すべて残酷ということになる。

けれど俺は、ふいに思い出した。相手がだれでも同じだらうと、

けれど俺は、ふいに思い出した。相手がだれでも同じだらうと、

お袋にも言われたことを。

俺は、お袋と元力ノに同じ評価を下されてるのか？

最近、俺が思つ『普通』は「」とへ否定されている氣がするよ。

「恋愛はね、理性が働いてるつうのは、まだまだ本氣じやないのよ」「

「俺、中江さんに本氣じやなかつた？」

「そうね。まだ余力がありそuddたわよ。でも私も自分勝手だし、本氣で来られたらつきあえなかつたから、会わせてもうりえてありがたかつたわ」

けれど、結局別れてるんだよな。よくわからないよ。なにが良かつたのか、なにが悪かつたのかも。

しばらぐとつとめのないことを話したり、スケッチするのを眺めて過ごした。

帰りかけたとき、机の端に文庫本が置いてあるのに気がついた。なんの氣なしに手に取つて表紙を見る。

「へえ、源氏物語なんか読んでるんだ」

俺が以前、古典対策で読んで途中で挫折した源氏物語は、もつと分厚いハードカバーだった。こんな読みやすい文庫本もあつたのか。

「読むなら持つて帰る？ もう読み終わったからいいわよ

「うーん、読み切る自信、ないなあ」

俺は、打ち上げコンパで後輩にからかわれたときのことを思い出した。

「中江さん、光源氏の最初の妻ってだれ？」

「葵の上よ」

「葵の上……あおいのうえ……あおい……碧……あ、そうか。碧ちゃんか！」

柚希はあのとき、正々堂々と惚氣ていたのか。いや、口説いていたのかな。もしくは、プロポーズだったりして。いくらなんでも、それは飛躍し過ぎか。

あのとき碧は、そわそわと落ち着かない様子でビールを口に運んでいたよな。あれは、恥ずかしがっていたのか。

「柚希ちゃん、やることが男前だなあ……」

思い出し笑いをかみ殺しながら、俺はこいつを呟いた。

中江のアパートを出て、書店で就活のための資料を探していたら、マナーモードにしていた携帯が振動した。
開いて確認すると、柚希からのメールだった。

『碧さんの誕生日、『存じないですか？』

愛想も素つ氣もないメールはいつものことだが、内容に首を傾げながら返信する。

『わからないな。さくらちゃんなら知ってるんじゃないの?』

『體やんこ口止められてるみたいで、教えてもらえないんです。写真部の名簿に誕生日の項目、なかつたですか?』

返信したら間を置かずレスが来る。電話した方がよかつたなと思ひながら、あとひと嘴くらうだし、そのまま返信を続けた。

『なかつた。学年と学部と、あとは住所と電話番号、メールアドレスくらいだし。もしわかつたら連絡するよ』

『ありがとうございます。お願いします』

つかあつてる彼女の誕生日がわからなくて、困つていい感じ。なんだと訊くのは野暮だよな。誕生日を體と一緒に過ごしたのだから。微笑ましくて嬉しくなる。このふたりのことは、いろいろ心配した分、うまくいってほしい。しかし、四月に柚希が入部して、夏休みにはかなり仲良かつたよな。十一月も末になるのに、まだ、誕生日を知らなかつたのかな。九月か十月だつたら、来年まで待つしかないのに、どうするんだどう。

そういえば、凜の誕生日はいつかな。

誕生日を過ぎていいたら、十一歳。まだなら十歳か。もし誕生日が近いなら、記念写真を撮つてあげる、と提案するのはどうだり。不自然ではないはずだ。テーマパークにでも連れて行つてあげたら喜ぶんじゃないかな。写真を撮つても自然な流れだし。

……て、ちょっと待て。なんか変なことを考えてるぞ、俺。これではまるで、彼女とデートをしたがつてゐるみたいじゃない

か。

凜は近所の子どもで、被写体にしたいだけだらう。

おかしい……。
なんか、変だ。

柚希をモデルにしたときは、普通に頼み込んだよな。おかしな感情は着いてこなかった。いや、そうか。柚希は写真部の後輩だから、モデルになってくれと言いややすかつた。

だけど、凜はそれができないから、ややこじっこになっているんだ。

俺はよひやく、納得した。納得した気になった。

欲求不満かな……。

いま、元カノのアパートから朝帰りだということを、俺はすっかり失念していた。

第十一話 元カノのアパートから朝帰り（後書き）

年の差カップルを書こうと思つたとき、最初は男を年下にすることしか考えませんでした。でも、そうするとまた、恋愛度数が上がり、エロい展開になつてしまいそり……との判断で男を年上にしました。この場面とか、熟女好き云々は、最初の妄想の名残り、みたいな感じです（笑）

第十一話 年の差カップルとか碧とか

ゼミの空き時間を、俺は部室で自習に充てていた。図書館に行つてもよかつたのだが、やはりここの方が落ち着く。

バレエの迎えに行つたときから、ふと気がつけば、俺は凜に思考を巡らせてくる。

車の中で見た凜の姿が目に焼き付いて、なかなか消えない。俺は、どうしても凜を写したいらしいのだ。そのことを凜に伝える手段がなくて困っている。

単なる近所の子どもなら、いくらでも頼める。だけど、その相手が許嫁となると、下手に近づけない。少なくとも、自分から故意に近づくのはまずいだろう。

婚約話さえなかつたら、簡単に頼めたのに、困ったもんだ。うーん……。あの婚約話、やせっぱりどうにかできないかな。

円満な婚約解消。それが俺の思い描くハッピーエンドだ。

扉にノックの音がした。俺の返事も待たずに飛び込んできたのは、碧だった。

「あれ？ 副部長、ひとりですか？」

「碧ちりやん！」珍しくひとつ？

柚希かさくらと一緒に部室に来ることが多かつたから、碧がひとりでいるのを久しぶりに見た。タートルネックのセーターにファーがついたブーツ姿をみて、もう季節はすっかり冬だよなと改めて感

じた。

「忘れ物を取りに来たんです。学生課に鍵をもらひに行つたら、なかつたから。副部長、こんな時間に、なにしてゐんですか?」

「レポートだよ」

「全然、はかどりにならじょ」

「なんでわかるの?」

「資料もパソコンも出してないし」

「実は、物思いに耽つてた」

「悩みもあるんですね?」

「悩み、とまではいかないけど、結婚について考へた」

「就活すつ飛ばして、婚活ですか?」

碧は呆れたよつこ、口をぽかんと開けた。

「いや、そんな具体的なものじゃないよ

「はあ……?」

「碧ちゃん、結婚について考へる?」

「あたし、こまのところ、結婚する気はないんですよ

「柚希ちゃんとも？」

「瀬戸さんはつきあいはじめたばかりですよ。結婚とかそんなこと、考える段階じゃありません。でも、瀬戸さんなら、なおさら結婚なんてないです」

「どうして？」

一応からうじてなんとかギリギリ男女なんだし、戸籍的には問題はないだろ？

「瀬戸さん、恋愛はあたしが初めてだし、それで結婚とか、傲慢じゃないですか？」

「傲慢？」

なんか、想像と全然違う言葉が碧の口から出てきた。てっきり、結婚式で花嫁衣装をどっちが着ればいいかわからない、なんて次元の心配かと思ったのに。

「可能性を奪うみたいな感じ、しません？」

「可能性？ うーん、うつかな？」

「遠い先の時間を拘束する約束でしょ、結婚つて。なんか残酷な感じがするんですよ」

残酷というキーワードがまた飛び出した。

女の子が結婚について語るときに、なぜ『残酷』と表現するのか、

理解に苦しむよ。結婚は女の夢じゃないわけ？

「あたし、最初につきあつたひどが、十三歳年上だったんです」

「十三歳？　ずいぶん年上だね。どんなひど？」

俺と凜が十歳差だから、せりに年が離れている。俺は興味が湧いて、身を乗り出した。

「ラジオのロ」なんです。中三のとき、受験勉強しながらラジオ聞いて、このひとの声、甘くて低くてかっこいいなあって思ったのがきっかけで……」

「へえ、そうだったんだ」

なかなか華やかな出会いだったんだな。ラジオのロ」といつたら、中学生から見たら、芸能人みたいなもんだろうに。おっかけが高じて……って感じかな。ラジオの収録は案外近所だつたり公開してたりするもんな。

「結局、最終的に別れちゃつたんですけど、別れなかつたら、瀬戸さんと出会つても、つきあわなかつたと思つんです」

「なるほどね……」

一年のとき、碧は短いサイクルで彼氏が交代していたが、交際の時期が重なったことはなかつた。正直で素直な性格だ。一股できるほど器用でもなれば、平氣で嘘つくほど薄情でもないのだ。

「瀬戸さん」とつてあたしがそのひとに該当するとしたら、この先

もある気がする)……」

「うーん、そうかなあ。柚希に関してそんな心配は無用のよつて思えたけど、碧の言いたいことは理解できる。自分の存在が、相手の新しい出会いを妨げるなら躊躇するに違いない。経験値に差があると、どうしても遠慮する気持ちが湧くのだわ。」

「カミングアウトしてから、女の子にモテてるんですね」

「柚希ちゃん?」

「はー。女だと思われていたときは、友達でも近寄りがたいと敬遠されてたんですけど……」

女としては完璧すぎて友人扱いするのも気おくれするけど、男なら女装も程よい欠陥になるってことか。女の子の心理も面白い。

「佐々木みたいに男くさい奴よりいいのかな」

「そういう子も多いみたいですよ」

「あの美貌で女の子にモテたら、まるで光源氏だね、葵の上」

「…………気づいてました?」

碧は、ぱつぱつの悪戯つな顔で苦笑する。

「あのときは気づかなかつたんだ。源氏物語をちゃんと読んだわけじやなかつたから」

「気がつかないまましていて欲しかつたな」

「女の子の立場から、あんな求愛ダンスは嬉しいの?」

「求愛ダンスって瀬戸さんは鶴じゃないんですけど……。でも、嬉しいですよ」

「やうか。なるほど、なるほど……」

「口説きたい相手でもいるんですか?」

「いや。彼女もいないし」

「許嫁はいるの?」

話の風向きが怪しくなってきた。俺は慌てて会話を戻した。

「柚希ちゃんは、船だけで充分なんじゃない?」

「どうしてですか?」

「彼女、一途で不器用だから」

「彼女じゃなくて、彼なんですけど……」

「あ……」

俺たちは顔を見合わせて笑った。

「 もうこえれば、君い、つせあつめ前と変わらぬ」

俺はふと思って出しして、以前から疑問に思っていたことを口にした。

「 変わらないって、なにがですか？」

「 お互いの呼び方とか。恋人同士なのに、瀬戸さん禮やんのままだ
る」

「ええ、まあ……」

「 ふたりのときは違うの？」

「 こえ、こつも通りですよ」

「 柚希ちゃんは、ふたりきりでも敬語で話しているの？」

「 そうですが、なんか変ですか？」

「 いやだって、恋人同士なら名前で呼び捨てにするのが普通かなつ
て」

「 なんですか？」

「 ーん、言われてみればなんでだろ。そんなこと、考えてみたこ
ともなかつた。」

「 ただなんとなく、それが普通と思つてた、としか言つようがない。
あえて説明するとしたら、けじめ、かな。もしくは周囲に、この
子は自分の彼女だとアピールしたいのかもしない。」

「副部長、自分が考へてることと、普通で標準だと想つてゐるでしょ」

「違ひ?」

「確かに副部長の考え方つて一般的に多いけど、普通とか常識つて、ひとそれぞれじゃないですか?」

「……」

瀬戸は案外するどい発言をする。訊けばそうかも、と頷ける説得力もある。だけどそれなら、普通とはなんだろ。俺はますます混乱してきた。

「ヒーリングアーティスト、君、誕生日いつ?」

「瀬戸さんによ頼まれたんですか?」

「『瀬戸さんの誕生日、いつか知りませんか?』とは訊かれたけど、訊きだしてくれとは頼まれてないよ」

「誕生日は企業秘密です」

「彼氏に教えられなこよひな誕生日なの?」

「まあ、そうですね。あたし、子供の頃から自分の誕生日嫌いだつたんで」

「わかった。敬老の日だろ」

「ノーハメント」

碧はなかなかガードが固い。

第十一話

年の差カツプルとか碧とか（後書き）

第十二話 部長の事情

碧と話をして、気がついたことがある。

年齢差が同じでも、出会った時期が早いほど、異常性が増すということだ。

たとえば十歳差で考えてみても、五十歳と四十歳ならどうってことないのに、二十歳と十歳なら、変態の領域だ。

碧なんかは十三歳年上だけど、十五歳のときの一十八歳の彼氏と訊けば、恋愛としてはあり得る範囲だもんな。

それにして、こんなことを考へてる時点で、俺は相当やばいんじゃないのかな。

凜を写したい気持ちが高じて、ストーカーになつたりしないよな。ただ、とにかく一度、凜の親に訊いてみたい。許嫁の話がどんな理由から来ているのかと。たとえば、親同士が一緒に飲んだときに盛り上がり、冗談交じりに口約束した、なんて経緯なら振り回される必要はないわけだし。

そんなことをとりとめもなく考へながら、俺は学生課にずらりと張り出された就職情報を眺めていた。もつと焦らないといけないんだけど、どこでもいいから内定をもらいたい、とはまだ思えないんだ。

できれば興味のある三つか四つに絞つて攻めたい。こんな悠長な野望は、数か月後には木つ端微塵になるんだろうか。

「松浦」

名前を呼ばれて振り返ると、篠崎部長だった。

「部長、大学、来てたんですねか?」

すでに内定をもらつていてる部長は「」の時期、単位の取得も終わつて、卒論に忙しきはずだ。てつせり、アパートに引きこもつてると思つていた。

「部屋より大学の方が集中できるんだよ。図書館の自習室に行つたり、カフェで半田陣取つたりしてる」

「なら、たまには、部屋にも顔だしてくださこよ」

「わかつた、わかつた。近づいて必ず行くよ。それより松浦、昼飯、食つた?」

「いえ、まだです」

「学食、行くか?」

「やうですね、お供します」

毎時はいつも込んでいる学食だが、いまは少し時間がずれでいるから空席が目立つ。

「JUJのA定食、食うのもあと少しだと懲りつと、なんか寂しいな」

「ははは。俺はあと、一年食わなきゃいけないのかつて気分ですかね」

「来年の今頃になつたらわかるつて」

そんなもんかな。まづくはないけど飽きたよな。ほとんど変わり映えしないし。

白身魚のフライを齧りながら、俺は部長に就活のこと尋ねた。

「部長、就職先を選ぶときに、なにを最重要視しました?」

「まあ、ありきたりだけど、仕事内容だな」

「やっぱっこですよね」

「だが、それは入つてから動かされる可能性もあるだろ。開発希望しても営業に移動するかもしけねえし、広報かもしけねえし」

俺は頷いた。

「だから、どこの部署に異動になつてもやれるところを選びたいよ

「それは確かに言えてますね」

「あとは転勤がないところだな」

「転勤?」

「俺の場合、彼女が短大卒でもつ、社会人だし」

俺は少なからず驚いた。コンパで彼女との結婚について訊いたとき、それほど積極的な姿勢は感じられなかつた。彼女と結婚することを視野に入れて就活していたとは、恐れ入つた。

「仕事内容に加えて、場所と転勤がない事なんて条件に入れて、ようく内定にこぎつけましたね」

「それだけ優秀なひとなんだろうけど、凄いよ。」

「理数系はまだ、職種も多いからな」

部長は箸を置いて、お湯みたいに薄い学食のお茶を、喉に流し込んだ。

「俺はむしろ、枠を作つてもらえて有難かつた。選ぶ会社が多すぎたら、迷つてきりがなかつただろうし。だから、彼女が先に社会人になつてくれててよかつたんだ。もし俺が先に社会人になつていて、彼女が俺を追いかけてくるつて言つたら、絶対反対しただろっしゃ」

「なんですか？」

「順番が逆になるだけで、同じことなんじゃないのかな。」

「俺が原因で仕事を選んだりして振り回すのは、避けたかった」

「これを優しくと受け取るか身勝手と受け取るかは、意見が分かれそうだな。」

彼女が就職するときは自由に選べたけど、部長は制限された中で職場を選んだわけだ。彼女からしたら、精神的に負担もあつたんじゃないかな。ここまでしてもらつたから、絶対このひとと結婚しないやいけないのだとプレッシャーになるかもしれないし。

「そういうお前、例の許嫁はどうなつた？」

急に話を振られて、俺は口の中のサラダが喉に詰まるかと思つた。

「どうもなるわけありませんよ。小学生なんですから」

「でもお前のことだから、気にほしてるんだが」

「ええ、なんとか白紙にしてもらいたいと想つてます」

「こつそ、育つのは待つて結婚しちまえばいいんじゃないのか？ 親が決めた相手つてのは、相性がいいんだろうじ、松浦はだれが相手でも問題なさそうだ」

「部長、無茶言わないでください」

「冗談だつて」

俺はこつそり嘆息した。また相手がだれでも同じ、ヒツトの判定をいただいた。

それほどモテるわけではないけど、一の足を踏まれるほど見苦しいわけでもない。それなりに恋愛経験もあるのに、なんでこんな評価ばかり受けれるのかな。

「俺つて、そんなに恋愛に無気力に見えますか？」

「え？」

「最近よく言われるんですよ。だれとつきあつても同じだらう的なこと」

「ああ、なるほど。松浦は彼女を特別視しないからな」

「特別視？」

「たとえば、友達と約束してる日には、彼女が遊びに行きたいって言つても断るだろ？」

「そりや、先に約束してれば断りますよ」

「お前は友達でも後輩でも彼女でも、同じ扱いしかしそうにないんだよ」

「ええ～」

「そんなはずはない……と思う。

だけど、俺にそんなつもりがなくとも、相手は部長と同じ受け止め方をしていたのかもしれない。

全力でだれかを好きになつたこと、あつただろうか。他のなにより優先したいひとに出会つたことがあつただろうか。

思い返しても記憶にないこと、「俺はショックを受けた。

「松浦は、恋愛より結婚に向いてんじゃないかな？」

「恋愛の集大成でしょ、結婚は」

「俺の彼女は、恋愛と結婚は別だつて言つや」

「そりなんですか？」

部長に頷かれて、俺は考え込んだ。男と女では結婚観が違うのかな。の方が結婚に対して冷静なのかもしれない。

高校のときの恋愛は、夢の中のようなときめきだった。二十歳を過ぎて、就職や将来が見えてくると、恋愛も現実を帯びてくる。相手の欠点を受け入れながら、時間の流れを考える。

実際、大学で出会い、卒業して結婚したカップルは多かった。

だがいまの俺には、恋愛と結婚を切り離して考えることもできないし、結婚と就職活動を連動させて動かすこともできない。

とりあえず願うは、部長が長年連れ添つた彼女に、振られませんよひつてことだ。

第十一話 部長の事情（後書き）

[与真部の男共は、どうも頼りないと云ふか弱腰な感じです。柚希も含めて。

唯一、部長だけは少々しだけ、俺様キャラのつもりだったんですけど、なんか怪しい気配がしてきました。

第十四話 佐々木の正体、発覚

十一月に入り、急に寒さが本格的になつた。

その日、ゼミが終わって部室に行くと、佐々木と柚希がすでに来ていた。部屋がしっかりと暖まつてるので、どちらかはかなり前に来ていたのだろ？。

「早いな、ふたりとも」

「ひといでせ」

「俺は今日、午後からの選択授業が休講になつたんですよ」

先に来ていたのは、佐々木のみつだ。
しばらくすると、碧とそくらが到着した。

「碧さん、その髪、どうしたんですか？」

柚希が問いかける声に反応して、俺の視線も碧の頭に移動した。
確かにちよつと、はねている。こや、広がつてゐる？。

「風とか静電気とかの猛攻撃で、パリパリする」

「束ねたほうがよくなですか？」

「括つてたけど強風でもひやひやになつて、やへりと外れりや
つた」

「小畠さん、碧さんをこじめないでください」

「だつて、すゞく不器用になつたんだもん。いやんと話つてないから風ぐらこで崩れるんだよ。碧が不器用すゑゐの」

「ええ~、なんどよ。そんなに不器用じやないもん」

「ほいほい。そんなわけだから、瀬戸さん、これ、どうとかしてあげて」

セベリが溜め息交じつて肩を竦めた。

「はあ…。碧さん、どうします?..」

「じつにかしてあげて」

おこおこ、文学部のくせに、日本語おかしくないか?

「じゃあ、後ろで編み込みますね」

頼まれた柚希は、なんとも黙つてなにいらしこ。愛の力かな。すこい力だな。

言葉通り、柚希が碧の髪を編み込んでいく。器用なもんだ。

しかし、碧はやはり不器用だったのか。せつじやないかと思つてたんだよな。なにをせてもどんくさこところがあるし。

ときどき碧は、妙に複雑な髪型のことがあるけど、あれは柚希がしていたんだな。柚希もいじらしことにうか、なんというか……。

そういえばこの間、凜は髪を綺麗にまとめたよな。あれから

お袋に訊いたら、バレエに行くときは、母親が仕事の日はひとりでバスに乗つていくそうだ。凜の母親もできる限り夕方に帰れるシフトを組んでいるらしいのだが、人手不足もあって、夕方の勤務と習い事が重なつてしまつた日があるようだ。迎えに行くときは間に合うようにしていたのに、ついに先日、迎えに行けない事態になつてしまつたのだ。

凜がひとりでバレエに行くときは、当然身支度も自分でしているわけで、あの髪も自分でしていたのだろう。

女兄弟がいないから、凜がしつかりしているのかどうか判断できないが、碧の有り様を見ている限り、たいしたものだと思ってよさそうだ。

「松浦さん、こういうの珍しいんですか？」

食い入るように見ていたら、柚希に尋ねられた。

「珍しい。面白いから、写したい」

「私はべつにかまいませんけど」

「あたしもいいですよ」

被写体ふたりの許可が下りたので、俺はカメラを構えた。

「写真部の部員に、この手の頼みを断られたことはない。お互い、写し合つて練習することも多いからだ。」

部室では何度も撮影したことがあるから、だいたいの光量は把握している。柚希と碧をふたり入れるなら、コントラストは落とし気味にして露出をあげるか。思い切つて、シャッター速度を極端に遅くして、ブレさせても面白いよな。あまりのんびり迷つていたら、

柚希の作業が終わってしまってから、俺は露出をあげて『や』
とこした。

「柚希ちゃん」

レンズ越しに声をかける。

「はい？」

「それ、難しいの？」

「わりと簡単ですよ」

「後ひでひとつに丸くまとめる髪型、知ってる？」

「日本髪ですか？ 着物のときにするような」

シャツターポにかまわず、会話を続ける。

「いや、違う。バレエや体操選手がするようなやつ」

「ああ、シニヨンですね」

「名前があるんだ」

「はい」

「難しい？」

「私はしたことがないんですけど、慣れればできるみたいですよ。シーランは私より亜衣の方が詳しいんですよ。」

「へえ。どうして？」

「亜衣は以前、バレンを畠つてたので、自分でシーランにしてたんですね」

「なるほどね」

「シーランがどうかしたんですか？」

「近所の子がしてるのを見たから、難しいのかなと思つたんだ」

話してゐる間に碧の頭は完成したりしい。

「あー。すみません。瀬戸さん、ありがとうございます」

「どういたしまして」

笑顔を交わし合つふたりの様子は、やはり恋人同士なんだよな。うーん、なんかちょっと、

「…寂しい…」

「は？」

「妹を嫁に出したみたいな気分だ」

「碧ちゃんの」と、妹みたいに思つてたんですか？」

「いや、妹のよつて思つてたのは君だよ、柚希りやん」

「……あの、ペルパーに迷惑なんですね。せめて弟にしてもらわ
ませんか？」

「それがさ、俺には君と同い年の弟がいるんだよ。この弟が、君と
は似ても似つかないから、仮でも弟にはたとえられない」

「だからって……」

柚希は眉をひそめて、唇を尖らせた。部室に笑い声が広がった。

「あー、でもそれ、わかります。俺も弟いるし」

手を叩いて笑いながら、佐々木が俺に同調した。

「佐々木くん、弟いたの？」

さくらが意外そうに尋ねる。

「弟、つつても、俺、双子だし、年は一緒だけどな」

「嘘ツ！ 佐々木くん、双子なの？」

碧が飛び上がりそうな勢いで振り返ると、佐々木の言葉に食いつ
いた。

「あ、ああ、そうだけど……？」

「ひどい！ そんな大事な」と、なんで今までたしに内緒にしてきたのよ？」

「ひどいって、大事なことって、内緒つて…。え？ え？ なんで？」

佐々木は碧の剣幕に、あとずさつた。

あーあ、これはまた、面倒なことになつた。

しかし、佐々木は双子だつたのか。知らなかつた。

俺はこつそりさくらの方を見た。お互いタイミングが重なつて、田と田が合つた。俺が佐々木に視線だけ向けて暗黙のまま尋ねると、さくらは首をブンブン振つた。さくらも佐々木が双子だつたことは、知らなかつたようだ。

「別に、内緒とかじやねーけど、わざわざ言ふらすよーなネタでもねーし……？」

佐々木は、碧に詰め寄られて戸惑つている。いまいち、事態と状況がわかつていないので。

「ねえ、どんな弟なの？」

「どんな、つつてもなー……」

「似てる？」

「一卵性だし、顔とか体格は似てんじゃねーか？」

「うわー、一卵性なんだ。そつくりのヒグマが一頭……。可愛いー

ううとうとうとして、碧は身もだえしながら喜んでいる。

碧の田にも、佐々木は熊に見えるんだな。こんなでかい熊が一頭もいたら、可愛いよりも苦しいと思つんだが……。しかし、この状況で心配なのは佐々木や碧ではなく、柚希だ。

俺はドキドキしつつも柚希に視線を向けた。

なまじ綺麗な顔だから、すゞい迫力だ。碧が佐々木に興味を持つたのが、相当不満なんだろう。

からなあ。なんて傍迷惑な体質なんだ。

「へー、兄弟そろつて鉄道マニアなんだ」

「まーな。弟は乗り鉄だけどー

「乗り鉄つてなに?」

佐々木と碧が盛り上がりついている。このふたりがこんなに仲良くしているのを初めて見た。見慣れないから、違和感ありまくりだ。しかし、碧の鈍さは殺人的だよ。彼氏の前で他の男に興味津々な自分の罪に、なんで気づかないのかな。

部員の中では有名な話だから、とつくに全員知つてるとばかり思つた。

柚希も素直に、自分以外の男に興味を持つなと言えばいいのにな。
あんまり気の毒なので、俺は助け舟を出すことにした。

柚希の死角になるように背中を向けて携帯を開き、碧にメールを打った。

『君の光源氏は焼餅やきみたいだよ』

ポケットに携帯を突っ込んでから送信ボタンを押した。

さつき写した写真をカメラの液晶に表示させてチェックしていると、少し離れた場所から携帯の着信音がした。顔を上げて確かめてみるまでもなく、碧の携帯だ。

碧が携帯を開く気配がしたが、俺は知らん顔を決め込んだ。

「あれ？」

声を出したあと、碧は考え込むように口を噤んだ。俺を見ているかもしれないから、余計に素知らぬふりでカメラから視線を上げない。

「瀬戸さん、焼餅やきなの？」

ストレートに訊くんかいッ！　俺は頭痛がしそうだった。

「そんなことないですよ」

そして柚希は恐ろしく恋愛下手だ。肯定しどけばいにものを……。

「だよねえ」

笑顔で頷き合っているのが、悲惨きわまりない光景に見えてきた。できるだけこのふたりには、かかわらないようにしよう。とてもじやないけど、手にあえない。

「佐々木さん」

柚希に呼ばれて、佐々木は顔を上げた。

「ん？」

「す、じく迷惑なんで、やめてもらいたいんですけど」

「へ？ なにを？」

「双子を」

「は？ なんで？ ビーツやつて？ つーか俺、柚希ちゃんになんか迷惑かけた？」

佐々木がわけもわからず、おたおたしている。柚希の方が学年はひとつ下なのだが、どうも佐々木は柚希に弱い。十月までは柚希を女の子だと思っていたから、その名残りだらうな。ひとのことに言えないうけだ。

「衆さんと合体してひとりになるとか、出来ないんですか？」

知性溢れる法学部の学生が、無茶なことを言つてゐる。みまぐ頭に血が上つてゐるらしい。

「ロボットじゃねーの、できるわけねーよ！」

佐々木が盛大にがなりたてる。

「…………まあ、これざじう見ても佐々木が悪いよな

「やうですね」

俺とさくらが溜め息をついて肩を落とすのを見て、佐々木がますますパニック状態になった。

「なんで？　なんで？　俺がなにしたって言つんだよーっ？」

なにつてそりゃ、双子だよ。

第十四話 佐々木の正体、発覚（後書き）

この場面は、前々作「恋を感じるとき」の最終話に入れようと思つてました。

でも、最終話は5000字くらいになつてしまつて、脇役のちんたらした話をぶち込む隙間がなかつたので、なくなつた部分です。

結構好きなお話です。楽しいし（笑）

佐々木君は元々、便宜上名前を付けただけで、たいして存在感のある役ではなかつたはずなんですが、途中から書くのが面白くなつた人物でした。

第十五話　凜と亜衣のバレエ友達

「ここにまはー。お邪魔しまーす」

微妙な空気が漂つ中、亜衣が部屋にやつてきた。

「柚希、パンフレット持つて来たよ」

亜衣が手に持っていた冊子を柚希に差し出した。

「あ、うん……」

「あのせ、何回も言つたが、行かなくていいよ。わたしはバレットモ
だけど、柚希は違つんだから」

「うふ……」

「駄目。瀬戸さん、絶対行つてきて」

碧が強い口調で話に割つて入つてきた。

「どうしたの?」

碧の表情がいつになく険しかったので、俺は亜衣に訊いた。

「中学からの友人がバレエの舞台に出演するんです」

「へえ……」

さつきバレエの話題になつたばかりだから、俺は顔が引きつりそうになつた。

「三月には主役をすることが決まってたので、高校卒業する前に絶対観に行くと約束したんです」

「なるほど」

「その舞台が、今月の一・十四日なんですよ」

「今月って、じゃあ、クリスマスイブ？」

「ええ」

亜衣は碧にちらりと視線を流すと小さく目配せした。

「そうか。恋人と過ごす定番の日だもんな。まして、つきあって初めてのクリスマスイブとなると、柚希としては迷うんだろう。でも、碧と知り合った前からの約束だから、碧はそっちを優先させると言つてるようだ。」

「碧さん、やつぱり一緒に行きませんか？」

柚希の申し出に、碧は首を横に振った。

「行かない。あたし、バレエとか全然わかんないし」

「…………」

「そう頑なに拒絶されれば、柚希は強く出られないだらう。碧にと

つては無関係の相手だし。

「だいたい、クリスマスイブだからってこだわる必要ないじゃん。いつでも会えるんだから。そんなことより、その友達の約束の方が、ずっと大事だよ。行かなかつたら、瀬戸さん、きっと後悔するから」

「わかりました。碧さんはその口、どうするんですか？」

「さくらと映画に行く」

「碧が3D見たことないから行きたいんだって」

柚希が嫌そうな顔をさくらに向けた。

「なに？ べつにポルノ映画に行くんじゃないよ。碧は未成年だし」

「だれもそんなこと、心配してませんよ。本当にふたりで映画に行くんですね？ 合コンに変更したりしないでくださいよ」

「大丈夫だよ。信用ないなあ」

「そりゃあないだろ？ さくらならそれくらいの悪行は日常茶飯事だ。元々、コンパ好きだし」

「……でも、そつか。イブコンパか……」

「小畠さん！」

「冗談だつて」

これだからさくらは信用されないんだよ。

しかし、碧は未成年だったのか。確かに、早生まれじゃないから来年の成人式には地元に戻ると話していたのを訊いた記憶がある。ということは、碧は十一月生まれか。それで柚希は焦っているんだな。いやいや、かかわらない、かかわらないぞ。俺は後ろ向きな決意を念仏のように唱えながら、髪を搔き上げた。

ふと柚希が持っているパンフレットの文字が目に留まって、目を瞠みはつた。

「柚希ちゃん、それちょっと見せて」

どうぞと差し出された冊子の表紙に、くるみ割り人形と書かれてある。先日、凜が話していたバレエの発表会と同じだ。凜も今月が発表会だと言っていた。

「亜衣ちゃん、くるみ割り人形ってなんなの？」

興味を抑えられなくて、俺は亜衣に尋ねた。

「チャイコフスキーの三大バレエのひとつです。白鳥の湖、眠れる森の美女、くるみ割り人形…って、まあ、とにかく映画のタイトルと同じですよ。クリスマスイブの夜にクララが不思議な夢の世界に行く話なんです」

それで、その舞台もクリスマスイブにするのか。

「中国は？」

「くるみ割り人形の中でもいろんな踊りのパートに分かれてるんです。中国の踊りはその中のひとつで、他にもスペインの踊りやロシ

アの踊り、アラビアの踊りとか色々あります

亜衣がパンフレットを開いて説明してくれた。それぞれの踊りの欄に、出演者の名前が載っている。中国の所に『庄野凜』の名前があつたので、俺は思わず「あつ」と声を上げた。

「知ってる子の名前がある」

「本物ですか?」

「亜衣ちゃん、この舞台って、バレエ教室の発表会なの?」

「はい」

凜を迎えて行つた文化ホールの名前を出すと、亜衣は頷いた。亜衣は中学一年まで、そこで凜のようにバレエを習つていたらしい。今回主役を踊る友人は、以前一緒に習つていて、いまでも続けるそうだ。

パンフレットの表紙をもう一度見る。十一月二十四日、十四時半開場、入場無料、とある。

「これ、だれでも行つたら入つて観られるの?」

「もちろんです」

「行こうかな……」

思わず呟いたときには、俺は行きたい、観てみたいに気持ちが動いていた。全然、ガラでもないのに。

第十六話 柚希の修業時代

その日の夕方、大学の図書館の前で、偶然、柚希に会った。

「資料集め?」

「はい。レポートがはからなくて」

抱えるように持っている本の数を見る限り、法学部のレポートもなかなか大変そうだ。

「松浦さん、就活はどうなんですか?」

「まだ動き始めたばかりだし、なんとも言えないな。説明会は参加してるけどね」

「三年生はみんなもつと大変そうなのに、のんびり構えてません?」

「そうかな。まあ、性格かもね。とにかく、碧ちやんの誕生日はわかつた?」

「いえ……」

柚希は悄然と首を振った。

「俺もそれとなく訊いてみたけど、企業秘密だとか言われてさ……」

「松浦さん、女の子は誕生日に恋人と過ごしたいとは思わないんで

すか？」

「いや、そんなことないだろ」

むしろ、忘れたり、手抜きする方が問題になつそうだ。そつぱつと、柚希も頷いた。

「法学部の女友達も、彼氏が誕生日を忘れたら、七代先まで呪つて言つんです」

えええええッ、そんなに？ 予想以上の恐怖に、俺は思わず過去の記憶を手繕り寄せた。今までの人生で、呪われるような凡ミスはしてないよな。

「昨日が誕生日だったかも、今日がそつかもと悪いと、気が気がしないんです」

「鶴ちゃん自身が教えないんだから、呪われる」とはないだろ

「そんな心配、しませんよ」

だらうな。いまの柚希は呪いだらひだらひだら、鶴から『あられたらなんだって受け入れそうだ』

「鶴さん、誕生日で二十歳になるんですよ」

確かに、二十歳は誕生日の中でも特別な響きがあるよな。自分のときほどつてことなかつたけど。

「プレゼントも禁止されてるし、誕生日も教えてもらえないし、そ

んな女子、よくいるんですか？

プレゼントまで禁止なのか。なんでだる。クリスマスイブも別行動決定だし、つきあって一ヶ月足らずにして、暗黒時代に突入してるかも。不憫すぎる……。

「うーん、俺の知る限り、訊いたことないなあ。碧ちゃんは、ちょっと変わってるからね」

可哀想なくらい落ち込む柚希に、俺はこめかみを押さえた。かかわらないと決めたはずなのに、ついどうにかしてあげたくなるのが、この珍妙なカップルの不思議な所だ。

「碧ちゃん、昔から自分の誕生日、嫌いだつたって言ってたな。俺はてっきり敬老の日かと思つたけど、十一月生まれなら違うね。今月で子どもが嫌がる誕生日は……大晦日かな？」

つけのお袋は、年末年始を主婦の地獄と言つて憚らない。大掃除やお節料理で忙しいときに誕生日のイベントをするとしたら、大変なんじやないだろうか。

「そうですね……」

柚希は考え込んだ。納得半分。疑念半分だな。推測の域を出ないんだから当たり前だ。

「碧さん、彼氏に素つ氣ないなって思つてたんですけど、自分が同じことされると、結構へこみますね」

「君とつきあう前？」

「はい」

碧の掴みどころのなさは、いつこうじうか。

去年、碧とつきあつてた奴に知り合いかいるんだが、そいつも、自分が碧に好かれている気がしない、とよく愚痴をこぼしていた。柚希に対しては、碧も積極的な態度だと思うけど、その柚希でさえ元カレと似たような悩みを抱えているんだから、碧の淡白な言動も多分にあるんだろう。

「……今から帰るの？」

気の利いた言葉も見つからなくて、俺は話題を変えた。

「区の図書館に寄つてから帰ります」

大学の図書館だけでは、資料が揃わなかつたようだ。

「ビ」の図書館？

登録カードで利用できる図書館は七つほどある。最近は提携して図書館が増えたからだ。

柚希が口にした図書館は、凜が通うバレエ教室に隣接する図書館だった。

俺は時計を見て、時刻を確認した。今日は木曜日だ。いまから行けば、練習に来る凜に会えるかもしれない。

「車で来てるし、送つてあげるよ」

「べつに、ここです。わざわざ、申し訳なことです」

「つこでだか」「ひ

「せうですか。じゃあ、お願ひします」

柚希が抱えてくる本を取り上げて持つてやると、柚希が慌てて手を伸ばした。

「松浦さん……」

「え？」

「女の子じゃないので、荷物、持つてもうわなくて結構です

「あ」

「忘れてたとか、言わないでくださいよ」

「こま一瞬、ガチで忘れてた」

「松浦さん、小畠さんみたいに……」

「「めぐ、「めん。ま、でも、後輩なんだから、甘えときなよ」

本を持ったまま、柚希を促して歩き始める。

「男の自覚を修行中の身なの」……」

そんな修行がこの世にあるのか。

「まだ、ほとんどの学生は君の正体知らないんだし、重い荷物持つてる隣で知らん顔してたら、俺が人聞き悪いだろ」

「知ってるひとが見たら、ホモだと勘違いするかも……」

柚希の言葉に、俺は立ち止まつた。取り上げた本を半分柚希に返すと、再び歩き始めた。

柚希は笑いながら、あとを着いてきた。駐車場まで歩いていると、何人が俺たちに、興味津々な視線を送つてくる。

「柚希ちゃん、君、やつぱり田立つけだよ」

「松浦さんが学祭であんな写真を展示するからですよ」

「うーん、それはそれで一理あるかも。」

「もし、ホモカップルだと思われてたら、私が女役だと考えるひともいるんでしょうか?」

「…………たぶん全員、そうだよ」

「なんで俺と柚希で、俺が女役とかあり得るんだよ。発想が異常すぎる。」

「はあ～……。早く、碧さんとのことが全校に知れ渡つてほしいです。学生課の掲示板に貼りだすとか、できないんですか?」

「できないだろ、そりゃ……」

碧とつきあうだけあって、柚希もたいがい天然だ。

第十六話 柚希の修業時代（後書き）

以前からずっと思つてゐるんですけど、この程度でもキーワードとして、読む人によつてはほんのりBL風味…なんつことを書くべきなんでしょうか？

柚希が性別不明みたいなキャラなので、この程度はショッちゅうあります。

拒絶反応のある方がいらっしゃつたら、ごめんなさい。

第十七話　凜が柚希に宣戦布告

区の図書館に着いた。が、そう都合よく凜に会えるわけもない。何時に凜がここに来るか、知っているわけではないのだ。迎えに来た時間から逆算して、可能性があるかな、と予想したに過ぎない。だいたい、会えるとか会えないとかが、そもそもおかしい。斜め向かいの家に住んでいるのだから、いつだって会える。俺はなにを望んでいるのだろう。

駐車場から柚希と歩いて移動する。図書館の入り口に差しかかったとき、馴染み深い声が飛んできた。

「惣介くん」

振り返ると、凜が手を振りながら駆け寄ってきた。諦めかけていたから、可愛い姿を見ることができて素直に嬉しい。

「今からバレ?」

「うん。惣介くんは……あつ……」

柚希に気がついて、凜が表情を硬くさせた。

「ほんとうは。瀬戸柚希です」

「え、えっと、五年三組、九番、庄野凜です」

どっちでもいい情報まで紹介してもらつたが「近所の子なんだ」と説明すると、柚希はにつこり微笑んだ。

凜は上田使いに柚希を見て口^一もる。

「…[印]真の、綺麗なお姉さん……」

凜の言葉で、俺は初めて思い出した。凜は俺の部屋で、柚希の[印]真を見たことがあるのだ。だからこのふたりは初対面だけど、凜の方は柚希の顔だけは知ってるのだ。

「あのとき[印]つたかな？ 大学の後輩だよ」

凜は[印]くと頷いた。

「松浦さん、私、先に図書館に入ります」

「ああ」

「あ、あの……」

凜の声に、柚希が振り返り首を傾げた。

「五年後は負けないんだからー！」

もう啖呵を切ると、凜はピューッと文化ホールに向かって駆け出してしまった。

柚希は呆然と凜を見送っていたが、俺に尋ねた。

「意味が全然わからなかつたんですけど、通訳してもらひますか？」

「いや、俺にもなにがなんだか……」

負けないってなんだ？

しばらく黙考していた柚希が、口を開いた。

「えーっと、やつきの凜ちゃんがくるみ割り人形で中国を踊る子ですかよね？」

頭が……。そう、シーロンだから、柚希もすぐわかったらしい。

「ああ」

「もしかして小学生の許嫁つて、凜ちゃんですか？」

なんでそんなことがわかるんだと思ったけど、隠してもしょうがないので肯定した。

「なるほど。わかりました」

「は？」

「今度、凜ちゃんに会つたら、ちやんと教えてあげてください」

「教えるついで、なにを？」

「私が男だところ」と、恋人がいることを

「は？ なんで？」

「なんでつて、松浦さん、鈍すぎますよ」

「へ？」

さつきから俺は、間抜けな声しか発していない。実際、柚希がなにをわかったのか、なぜ男だと教えると言つのか、さっぱり理解できなかつたのだ。

第十八話 第二回 大学写真部応援企画

就活にはのんびり構えていた俺だが、さすがにそろそろまじめに動き始めないとやばいかなと思い始めていた。

ゼミが終わって帰宅するつもりで大学の駐車場に向かって歩いていたとき、携帯からメールの着信音が鳴った。

『部室に、副部長宛ての封筒が届いてますよ』

メールの送信者は碧だ。今日は部室に寄る予定はなかつた。少し迷つたが、封筒の中身も気になる。

俺は部室に立ち寄ることにして、踵を返した。

部室はいつもと変わらないメンバーが、いつも通りに過ごしていた。
テーブルの端にA4サイズの封筒が置かれてあつた。

「これ？」

「はい」

碧がこくこく頷いた。

手紙だと思っていたので、首を傾げた。

宛先がM大写真部 松浦惣介様で、差出人が亜東出版社の沢波さんだ。学祭の取材に来て、俺が写した柚希の写真を気に入ってくれたひとである。

なにを送つてくれたのか、心当たりがないまま開封する。

茶封筒から出てきたのは、亜東出版発行の雑誌だった。地元情報

にページを多く割いている。パラパラと捲つてみた印象では、十代後半から二十代女性が読者のターゲットかな。

付箋が一カ所に付いている。最初の付箋のページに、M大の学祭が取り上げられていた。

「へへ、載せてくれたんだ。あ、名画のこともちやんと載ってるぞ、佐々木」

「ほんとっすね」

佐々木も感慨深そうに雑誌を覗き込んでいた。
雑誌に載ることなど想像もしてなかつたから、ちょっと感動してしまつ。

「JWUちの付箋はなんなの？」

さくらがページを捲る。

「第一回 大学写真部応援企画？ なにこれ？」

記事を読んでみると、要するに、写真作品の募集だ。応募できるのは大学の写真部のみで、テーマはカツプル。モデルは同じキャンパスの学生、撮影場所はキャンパス内であれば屋内屋外は問わない、とのことだ。

「去年もこんなのがつたんだ。知らなかつたな。さくらちやん、君、出してみたら？」

さくらは学祭でもカツプルの写真を出品したから、テーマが重なつていた。

「ひとつの写真部から出せる写真は一枚だけなんですね。うーん、M大写真部の看板を背負うことになるんだ。重いなあ……あ、賞金出るんだ。すごい。優勝したら十万円だつて。準優勝でも五万円だよ」

「ほんとに? あたし、魚眼レンズ欲しい」

碧がはしゃいだ声を上げた。そういえばこないだから魚眼レンズが欲しいから、春休みにバイトすると言つてたな。

記事を読んでみる。去年の出品校は九校だけだつた。第一回だから告知不足もあつたんだろうけど、雑誌自体も関東限定で販売しているみたいだ。大学の写真部に限定されてるし、応募はそれほど増えないだろう。競争率を考えると、この賞金は手が届きそつた気がする。

「あたしが撮る。絶対優勝する」

碧が鼻息も荒く、拳を握りしめた。

「碧、あんた、ほとんど人物、撮らないじゃん。大丈夫なの?」

さくらの心配そうな声に、碧は不敵に笑つた。

「モデルがよければどうにかなる」

碧が柚希を熱く見つめる。

「……私ですか?」

柚希が田を丸くして自分を指差した。

「他にだれがいるのよ」

碧より先にさくらが返事をしていた。

「だつて、カップルなんでしょう？ 碧さんが撮影に回つたら、カップルにならないじゃないですか」

「そう、つまりいー、相手の男が必要なんだよね……」

碧の視線は、佐々木と俺を行き来した。ちょっと、待て。なんか嫌な予感がするぞ。

「無難な副部長か、大穴狙いで佐々木くんか……。なんかどっちも微妙だなー」

うわー、やつぱり。

「碧さん、まさか松浦さんか佐々木さんでカップルに仕立て上げるつもりですか？」

「だつて、他にいないんだもん」

「だから、カップルは男女じゃなきや……」

「男女カップルに限るとほ、ビニにも書いてないよ」

さくらが頬杖を突いて、雑誌に視線を落としたまま告げる。

「わざわざ書くまでもないからですよ。詐欺で訴えられますよ」

「どっちがいいかな。副部長の方が確実に票は取れそうだけど、佐々木くんもインパクトは出るんだよね。美女と野獣ってタイトルにしたらうつくるかな」

「體やんつー」

柚希は悲鳴をあげんばかりである。

「……お前、やっぱおつかねーわ。魚眼レンズのために彼氏を男には売る気かよ」

佐々木が呆れて非難の視線を碧に向ける。野獣に対するコメントは特にないらしい。

「なにわけのわかんないこと言つてんの。写真撮るだけじゃん」

…………… どうか?

「冷静に考へてよ、瀬戸さん。あたしと瀬戸さんの組み合せで、カッブルに見えるはずないんだから。ここは建設的に魚眼レンズに近づかなければ」

碧がわくわく化している。邪悪だ。

「…………なら、こつしましょー。夏休みのバイト代がまだ残つてますから、それで私が魚眼レンズを購入します。碧さんとは同じメイカーですし、使うときはお貸します」

「駄目」

「…………」

「魚眼レンズって、個性強すぎるレンズでしょ。だから個人で買うより、写真部が購入してみんなで使う方がいいよ。これから入ってくる後輩も使えるんだし」

碧の説は間違つてない。

が、しかし、優勝すると決まつたわけではない。そもそも、応募するかどうかもわからないのに、碧の脳ミソは魚眼レンズまつじぐらだ。

仮に、優勝賞金をゲットしたとしても、使い道は部員で話し合うことになる。よしんば、魚眼レンズで意見がまとまつたとしても、ほとんどの部員が使つているのはニコンだ。キヤノン組は、俺と碧、そして柚希の三人だけ。

碧の野望が叶う確率は、ほぼゼロだろうな。

「おーっす、久しぶりー」

部室の扉が開いて、入ってきたのは、篠崎部長だった。

「部長！ 会いたかった、会いたかったー」

碧の熱烈歓迎ぶりに部長はきょとんとした。間の悪いとき来るひとだ。俺と佐々木は助かったけど。

「よかつたあ、三択になった」

……助かつたと思つたけど、即座に候補から落ちたわけではない

らしい。がっかりだ。

「なに、 いつたい？」

俺は雑誌を見せて簡単に説明した。

「へー、 面白そうだな」

柚希と相手役以外は、 確かに面白いんだけど……。

「とりあえず碧ちゃん、 沢波さんにお礼ついでにこのこと訊いてみるから、 それから決めよう。 だいたい、 モデルはキャンパスの学生なんだよ。 写真部に限らなくていいんだから」

「あ、 そつか」

はー、 疲れた……。

部長には、 最悪の場合、 モデル役の可能性もあります、 と告げた。

「いいよ。 面白いじゃないか」

「………… そうですか？」

「この状況で、 相手の彼女役は柚希の可能性が高いんだけど。

「絶世の美女にしか見えない、 彼女持ちの美少年の恋人役なんて、 この先の人生でも経験できそうにないだろ。 やれるものならやってみたいよ」

「…………」

ああ、立派なひとだつたんだな。

四月から、俺がこのひとの跡を継いで、部長になるのか。とても
じゃないが、肝つ玉が違うよ。

第十九話 家がもっと遠かつたらここ元

家に帰つてから、仕事中かと思つたけど、沢波さんに電話してみたら、あつさり繋がつた。

「雑誌、わざわざ送つていただきてあつがとうございました」

『今日あたり届くと思っていたの。おととい、もうちょっとスペーク取りたかったんだけど、通らなくて小やくなつちやつたわ。『めんね』

「いえ、とんでもないです」

『写真部応援企画、読んでくれた?』

「読みました」

『どう? 参加してみない?』

「実は、後輩で、はつきりてる子がひとつあるんですよ」

『本当? よかった。去年、闇古鳥が鳴こりやつたから、今年は賞金も増やしたのよ』

「あの、カップルつてどういふコンセプトなんですか?」

『あんまり詳しく話すと、依怙^{えじこ}龜^ごになっちゃうから、ちょっとだけ教えるわね。本当はミスキャンパスの写真を送つてもらおうかと

思つたのよ。読者にとつては知りたい情報でしょ？でも、それじゃありきたりだし、カップルも面白いかなって。高校生読者も多いし、受験したい大学の裏側もちょっと覗けたら嬉しいでしょ』

となると、背景もある程度大学の雰囲気を出した方がいいんだな。とはいって、写真部同士で競うんだから、スナップ写真では話にならないし、案外難しいな。

「あの……カップルは男女じゃなきや駄目ですかよね？」

『はあ？』

「いえ、すいません。なんでもないです」

我ながら馬鹿な質問だ。冷や汗が出る。

『あ、そういうえば、就職活動はどうしてるの？』

「まだ、説明会に参加してる程度です」

『本当にうち、受けない？ 私、人事じゃないから何もしてあげられないけど、現場で取材したり記事書いてる人間にとつては、松浦くんみたいな子は是非、来てほしいのよね』

「ありがとうございます。ただ、あの写真はモデルが……」

『確かにモデルの子は綺麗だったけど、それだけじゃないのよ。M大の写真部はエネルギーを感じる。その部をM大祭では実質、松浦くんがまとめてたんでしょう。そこが一番の魅力なのよ』

「…………」

『それにね、モデルの容姿抜きにしても、写真是魅力的だったわよ』
「……ありがとうございます。真剣に考えます。出版業界はやりがいのある仕事だと思うんで」

『ぜひね。なにかわからないことがあつたら、いつでも相談して』

「はい」

電話を切つて、息をついた。なんだか、力が抜けた。
自分に対する評価が、思つていた以上に高かつたことは、照れくさくも嬉しかつた。人事のひとじやないから、内定の期待ができるない分、気楽に喜べた。

「出版社か……」

紙の媒体は今後、厳しさを増していくだろう。それでも、紙を捲つて文字を読む心地よさは、なくなりはしない。俺自身、電子書籍に手を出してみたが、やはり紙の本に戻つてしまつた。

写真にかかる可能性があるのも、魅力は大きい。

「受けようかな」

送つてもらつた雑誌眺めながら呟いた。女性読者対象の雑誌だから、内容は正直、頭に入つてこない。けれど、ページの構成や写真の配置なんかを見る姿勢が、夕方とは違つてきたのを自覚する。

「やつたー、できたよ」

一階から女の子の声がかすかに聞こえて、はつとじた。

「え？ 凜ちゃん？」

俺は立ち上がり、慌てて一階に駆け降りた。

「凛ちゃん、来てたんだ」

「うそ。雄介くん宿題みてもひつたの」

「最近の小学生も、やらし宿題してるよな」

いろいろ教えられる限界かも、などと雄介は情けないことを口走つていて。

いくらなんでも限界つてことはないはずだけれど、俺や雄介はゆとり教育世代だし、思わず弱音も出でてしまつ。

大学に行つてからもサッカーを続けている雄介は、俺より体格がいい。身長は一七六の俺とそれほど変わらないが、体重は六、七キロ重くてがつしりしている。弟のくせに、まったく可愛くない。

凛が「一トを拾い上げていた。

「もう帰るのっ。」

「うそ。宿題終わつたから

「送つてこへよ」

「お向かいなの?」

「やつ暗いから」

玄関を出れば、凜の家はもう見えている。外は凍てつくような寒さだ。

「惣介くん、あの、こなじだのお姉さん……」

「柚希ちゃん? 図書館で会った?」

「うん。柚希ちゃん、怒つてた?」

「怒つてないよ」

「惣介くんは?」

「怒つてないよ」

「…………」

「凜ちゃん、なんであのとお、あんなこといったの?」

俺は、訊いてからしまったと思った。

あれから……図書館の前で凜に会つたときから、俺なりに考えた。凜が柚希に啖呵を切つた理由も、バレエの迎えに行つたときも、少し頬に触つただけで過剰に反応したことも。

本当は、薄々、気づいてる。凜の気持ち。でも、そんなはずなことも思つていた。

凜は小学生で、俺は大学生で、年は十歳も離れていて。

だから、俺がこんな気持ちになるのもおかしいし、凜が俺に好意を寄せていたとしても、それは近所のお兄さんに対する憧れでしかない。

あのときの凜の行動をつきとめじでじりするんだ。

「あたし……」

「『』めん、いまの質問はなしこじて」

「あの……」

「『』めんじゃなくて、柚希ちゃんが凜ちゃんに云えりつて言つてたんだ」

「え？」

「あのひと、男なんだよ」

「ええ？」

凜が驚いて言葉を失っている。図書館で会ったとき、柚希の服装はスカートではなかった。ジーンズにダウンのコートだったのに、やつぱり小学生の目にも、女の子に見えるんだな。まあ、髪も長いし肩幅も細いし、当たり前か。

「それに、彼女がいるから

信じられないような、ほっとしたような顔で凜が見あげてくる。

「ほ、ほんとに？」

すがりついてきそうな様子が、胸についた。

「ああ。あ、そうだ。凜ちゃん、くるみ割り人形の舞台、俺も観に行くから」

「え、なんで？」

「柚希ちゃんの友達が出るんだって。それで、俺も凜ちゃんを観に行こうとしたんだ。客席から応援してるし、頑張るんだぞ」

「うん……。あの、惣介くん、ありがとう」

凜の頭をなでてから、笑顔の凜に手を振った。家がもっと遠かつたらしいのに、そんなことを思つてしまひまど、あつという間に凜は家中に消えていった。

指に絡まつた凜のやわらかな髪の感触が、名残惜しく感じた。あといくつ、この寒い冬を過ごしたら、凜は大人になるんだろう。俺はまた、馬鹿なことを考えていた。
本当に、どうかしてみる。

第十九話 家がもっと遠かつたらいいのに（後書き）

この話、一部保存に失敗していたみたいで、書いたはずの部分が抜けていました。

更新直前に書き足しましたが、不安な事態です。

年末で、時間が足りなくなつてきました。

年賀状がまだ、手つかずです（×_×

第一十話 林原の就活事情

『惣介、いま暇？ うちに来られない？』

電話も内容も唐突だった。リビングの時計を見ると八時半。テレビでは金曜日のバラエティー番組が流れている。

林原は時々、前触れもなくこんな電話をしてくる。いきなりだけど、林原なりに俺が行けそうな時間を予想してかけて来てるんだろうな。

「モーテル？」

あれから連絡がなかつたから、てっきり仕上がつたと思ってたけど、また行き詰つたのかな。

『絵は仕上がつたよ。今回、自分でも気分よく描けたし搬入前に見せておきたくてさ』

「そりが。じゃ、いまからちょっと行くよ」

俺も大概つきあいがいいよな。

でも、俺みたいな自宅組は一人暮らしやルームショアしてる友達のどこに行くのは、ちよつとした気晴らしになるんだ。

お袋に林原のことを話して家を出ようとしたら、玄関先で呼び止められた。

「林原くんのところに行くなが、これ、持つて行きなやこ」

紙袋に箱が一つ入っている。コーヒーと缶詰の詰め合せかな。

「お歳暮にもうつたはぢ、うちはあまり食べないし。林原くんのところは男の子多いから、だれか食べるでしょ」

「わかった」

「あ、それより惣介、あなた、凛ちゃんのバレエ、観に行くんだつて？」

玄関に腰を下ろしてスニーカーを履いていると、お袋が訊いていた。

「ああ、やうだけど」

「凛ちゃんのお母さん、喜んでたわよ。それでこれ、預かつてきなから」

手渡されたのは『真部の部屋』で見たのと同じパンフレットだつた。どうやら、来てくれる人に、出演者が渡すものらしい。俺はパンフレットを手に、しばらく考えた。スニーカーを履いてしまったので、一階の部屋まで戻るのは面倒だ。

俺は、パンフレットを紙袋に突っこんだ。車に乗せておけばいいと思ったのだ。

「じゃ、行つてくる」

「林原くんによろしくね」

俺は紙袋を掴んで頷いた。

「これ……か。……凄いな……」

林原の絵を見た途端、俺は背中がざわめいた。

いいか悪いかなんて、全然わからない。ただ、重力から解放された、夢を見ているような世界に引き込まれる感覚に襲われる。最後に見たときと、まるで違つ。こんなに変わると思わなかつたから、驚いた。

「……俺は、好きだよ」

「」の絵が？

「他に、なんの話をじてんだよ」

「あんまり熱っぽく書つから、愛の甘口かと思つた」

「あのなあ、ひどがたまにほんのこ、茶化すなよ

「悪い、悪い。いや、褒めてもうれて本当に嬉しくよ。サンキュー」

「褒めるついで言つより、感動して。途中を見てるから、余計に込み上げるのかな」

「照れくさつて。といあえず座れよ。コーヒー飲んでいく時間くらうあるんだわ」

「ああ。あ、そうだ、これ、お袋から。お前がいらなあや、他のやつに分けろって」

「うわあ、助かるよ。お袋せんじよろしく言ってくれ。あれ？ 本みたいなのが入ってるや。これも俺がもらひ分なのかな？」

紙袋を覗き込んでいた林原が、パンフレットを引っ張り出した。

「え？ あ、違う。それは俺のだ」

林原からパンフレットを返してもうひとつ、俺は頭を搔いた。
危なかつた。
車で出すのを忘れていたのだ。

「ぐるみ割り人形？ あ、そつか。もうすぐクリスマスだもんな」

「え？ 林原、お前、知つてんの？」

「ぐるみ割り人形か？ そりや、知つてるよ。常識だい」

まじか。林原でも知つてゐて、「俺は知らなかつたなんてショックだ。

「クララが夢の世界に入つていいくときは、周りの物がどんどん大きくなつていくんだ。その演出がすごいんだよ。本当はクララが小さくなるんだけど、そんなことできないだろ。演出家や舞台監督の見せ場なんだぜ」

「観たことあるのか？」

「いや、実はテレビの特番で見た」

「なんだ」

「でもオレ、舞台美術に興味あるし」

「へえ、なんで?」

「就職先、映画会社か舞台美術に行きたいんだ」

林原の口から就職のことを訊いたのは初めてだつたから、少し驚いた。

「就職つて… そうか、同じ学年だもんな」

「なんだよ。オレが就職なんて変?」

「いや。でも、こんな絵を見た直後だし、会社に就職とか言われる
と、勿体ない気がして」

「(この)程度の絵なんか、美大の連中なら(ぐら)でも描いてるよ」

「そういうのか?」

「ああ。美大も油絵、彫刻、日本画はつぶしが利かないから、就職
も大変なんだ」

考えたら、美大の卒業生が全員、画家や彫刻家になるはずないも
んな。

「みんな、どうすんなの？」

「教師、田指すやつが多いな」

「お前は？ 教師は考えないのか？」

林原も教員免許は取っていた。教育実習の話を訊いたことがある。

「無理、無理。ガラじゃないし」

言われてみればそうかもしね。堅苦しい規格の中で力を発揮するタイプじゃないし。

「それより、なんでくるみ割り人形の本、持ち歩いてるんだ？」

「これ、本じゃなくて、パンフレットなんだ」

俺は、近所の子がバレエを習っていること、同じ舞台に後輩の友人が出演すること、観に行くことにしたこと、ここに来るときパンフレットを渡されたことを、簡単に話した。

「なるほどね。な、それちょっと見せて」

林原はパンフレットを受け取ると、食い入るように見つめた。

俺は、凜の名前が載つてるとこ以外は、どのページを見てもちんぷんかんぱんだった。さすが、舞台美術を田指しているだけあるなと感心した。

「あ、凄い。これ秦山真弥が舞台監督なんだ」

「だれ？ 有名なひと？」

「最近、注目される若手の舞台監督なんだ。へえ、バレエも手掛けれるのか。ふうん……」

林原は何度も唸り声を上げている。

「なあ惣介、これ、オレみたいなのが行つても観られるの？」

「大丈夫だろ。俺だつて立場は一緒だし」

「じゃ、行く」

「まじで？ クリスマスイブだぞ？ バレエ教室の発表会だぞ」

「わかつてゐるよ。オレはいま、現物をひとつでも多く観たいんだ。もし舞台美術の仕事をすることになつたら、バレエ教室の発表会だつてあるはずだし」

「そつか。マスクミが取り上げるような、有名な舞台の仕事ばかりじゃないのは、当然なんだ。むしろ、こつこつ小さな舞台の仕事の方が多めのかも知れない」

林原の話では、これから映画はCGやデジタル処理が主流になるだろうとのことだ。そして舞台は、アナログが根強く残るのではないか、と考えているらしい。映画会社か舞台美術で迷つていてる林原は、IT会社と出版社で迷つている俺に似ている。

「バレエ教室の発表会なら、たいしたことはできないはずなんだ。制限された中でどう演出するのか興味あるんだよ」

舞台監督や演出家の力量を図るには、じきさまつした舞台なりで
はの見どころもあるのかな。

「本当に行くのか？」

「行くよ。いいだろ？」

「いいナゾ、物好きだな。就活の一環ならしかたないのがもしけれな
いけど。じゃあ、どこかで待ち合わせするか？」

「もうだな。そうしてもらひると助かる

「俺もよくわからなーから、後輩の子と一緒に行つてもらひつつまつ
なんだ。駅で待ち合はせることになるナゾ」

「いいナゾ」

直前になつたら、詳しい時間と場所を連絡することにした。畠衣
と柚希も一緒に行へはずだから、四人で合流することになるだろ。

「やつこや、ゆか、十一月だな」

「ああ？」

「なんだろう、こきなり。

「こまでも十一月は献血に行つてんの？」

「ああ、うそ、行つてる。今年はまだ行つてないけど

「わざわざ、お願ひのハガキが来るんだる。珍しい血液型つて、ちよつと格好いいよな」

俺の血液はボンベイ型で、少し変わつてゐるんだ。で、十八から献血をしてゐる。年に一度だけだけど。

「そりか？ 自分がなんかあつたら、輸血してもらえなくて死ぬかもしけないんだぞ」

「うーん、そうだよな」

「それに、献血したつて無駄になつてるだろ？ うしな」

珍しい血液型ということは、人数が少ないとのことだ。その少ないひとが、事故に遭つて輸血が必要な事態になることは、さらに確率が低いってことだ。

「でも、献血して感謝されるんだろ？ オレなんか普通のB型だから、だれがしても一緒だぜ」

別の血液型になつた経験がないから、なにがどう違うかわからなければ、どんな血液型でも感謝はされてるだろ？

珍しい血液型だからとつて、得したこともなければ損したこともない。普通にしていれば、輸血が必要なほどの事故に遭うこともないだろ？ し。献血の呼びかけに、年に一度は応じてゐるけど、考えてみれば面倒くさい。

たとえば、何十万人にひとりの珍しさなら、気持ちや自覚も違つたんだろうけど、一百人にひとりなら、大学のキャンパスにも一人や二人はいる確率だ。

「でもさ、どこかにいるはずだけだ、出会えないだろ。血液型を名札に付けて歩いてるわけじゃないし。意外なひとが同じ血液型だったら、運命の出会いって感じ、しないか？」

「やうかなあ。でもまあ、話は盛り上がるかもな」

たいてして仲良くななくても、きっかけがあれば、懇意になれる」とある。それが二百人にひとつの中率なら、親近感も湧く気がする。まだそんな経験はないけど。

俺たちの日、そんなとつとめのない話で、妙に盛り上がった。

第一十一話 ぐるみ割り人形

クリスマスイブ当日、空は厚い雲に覆われた曇天だつた。待ち合わせの駅に着くと、柚希と亜衣はすでに来ていた。俺と林原が近づくと、亜衣が気づいて頭を下げる。

「（むちゅ）」

「（じ）めん、待たせた？」

「大丈夫ですよ。じゅうぶん余裕があるので」

開場の時間まで、まだ四十分くらいある。花屋に寄りたいからと訊いてはいた。

「あっ、もしかしたら、惣介の写真のモデルした子？ 学祭の」

林原が柚希の顔を見て尋ねた。林原のことはふたりに話してある。美大生で舞台美術に興味があると説明しておいた。俺がモデルをつめた絵の作者であるとも。

「（はい）」

「やうか、やつぱり。いやー、可愛いなあ。写真映りが特別なのかなと思つてたけど」

「あ、そうだ。柚希ちゃん、ごめん。林原には君のこと話してるんだ

勝手に柚希の性別をばらして悪かつたかな。こんな風に直接会つことになるとは思わなかつたから、正直、氣まずい。

「べつにかまいません。勘違にされたりわざわざ説明したりしなくて済むので、むしろ助かります」

「そつか。ありがとう。それで、亜衣ちゃん、なんで花屋に行くの?」

「出演する友達に、花束の差し入れをするんです」

やういうものなのか。

四人でぞろぞろフラワーショップまで歩いた。駅に隣接しているので、それほど遠くはなかつた。

亜衣と柚希が、店員と花を選んでいる。

「金平糖の精つて衣装がピンクなの。花もピンクがいいかな?」

「うふ。赤やオレンジはおかしいよ。ピンクか白でここんじやない」

レジ付近には出来上がつた花束がいくつも置いてある。みんな、バレHの出演者に送る花なのかな。うーん、右も左もわからないとは、このことだ。

「お聞きしますか?」

別の店員に声をかけられた。

「こやオレたちよ……」

林原が慌てて首を横に振つたが、俺は店員に歩み寄つた。

「花束をひとつお願ひします」

とにかく、どう選べばいいかわからなかつたから、亜衣と柚希に教えてもらひながら小さめの花束を作つてもらつた。

中国の踊りとやらは、赤い衣装だそつで、オレンジや黄色のバラがベースになつた。

考えてみたら、女の子に花束を贈るなんて、生まれて初めてだ。この状況で、凛にあげる花束を『贈る』なんでもものに入るかどうかわからぬけど。

会館に着いた。受付で花束を預かつてもらえるようだ。亜衣に倣つて花束にカードを添えて手渡した。

『凛ちゃん、頑張れ。楽しみにしてるよ』

カードにありきたりのメッセージを名前と一緒に書いた。困つた。妙に照れくさい。

そんなことをしてこるつむこと、開場の時間になつた。

亜衣にこの辺りなら観やすいと思つます、と言つて、並んで座つた。俺は柚希と林原の間で、柚希の反対隣りには亜衣が座つた。

何列か後ろに、カメラマン席がある。さすがにいいカメラだ。型番は古いけど、俺なんかじゃ一生、手にすることはないだろ。三脚も一流品だ。

それにしても、この距離から写すのか。いくら望遠レンズとはいっても、もう少し近いほうが写しやすくないのかな。

まだ開演まで時間があるので、俺は席を立つて動いてみることにした。客席を一通り歩いて空席に座つてみたりして、なんとなくわかつた。前から撮ると、見あげる角度になりすぎるのだ。それに、広角レンズを使っても全体を入れるのは難しい。後ろから撮れば舞台のどの場所で踊っていても、カメラに収まるようだ。

もちろん、客席への配慮もあるのだろう。前の真ん中で三脚を立てて撮影されたら、後ろの客は観覧しづらい。

席に戻つてしまふと、開演時間になつた。

客席が暗くなり、幕が上がつた。

凜の最初の踊りは七番目だ。

いま踊っているのは、幼稚園くらいの小さな子どもだ。動きは揃わないし、人数が多い。カメラマンは苦労しているだろうな。それに、舞台のスポットライトは目で見える以上に、カメラには厳しそうだ。止まつてくれればシャッター速度を遅くして光を取り込めるが、前後左右に動くから難しい。

それに一番目の踊りが始まつたときに、ライトの色が青くなつた。このまま写せば顔まで青くなる。踊りによつて、ホワイトバランスを変更しないといけないようだ。

大変だな。ここに来なければ、カメラマンが近くにいなければ、こんなふうに舞台を見ることはなかつた。なかなか新鮮だ。

凜の最初の踊りは、問題もなく終わつた。基準もなにもわからないうが、結構うまいんじゃないだろうか。普段会つているときより背が高く感じるのは、あのトウショーブとやらのせいだひつ。

このあと一十くらい踊りが続いて一幕が終わる。休憩をはさんで、二幕がくるみ割り人形だ。

それまでは正直、退屈だ。

最初こそもの珍しさで観ていたけど、だんだん眠くなつてきた。

これがまだ、似たような踊りが多いんだよ。さつきも踊ってなかつたっけ？　みたいな連続なんだ。

「柚希ちゃん」

小声で隣に話しかける。

「はい？」

「もし俺がくるみ割り人形まで寝てたら、中国のふたつ前で起してくれる？」

「わかりました」

「悪いね」

反対隣りを見れば、林原はとっくに眠り込んでいた。一幕に舞台監督の見せ場はないようだ。

一幕は退屈だったが、二幕のくるみ割り人形はなかなか面白かった。

結構、CMなんかで訊いたことがある曲も多くて驚いた。大道具や背景も多くて、林原は身を乗り出すように観ている。

中国の踊りはふたりで踊っていた。凜と同じくらいの背丈の男の子だ。

バレエ自体、踊る子はほとんどが女の子だけ、この踊りは男女のペアで踊るらしい。

色違ひの衣装に、同じ動き。

なんだか中国の民族人形みたいで可愛い。だけど、可愛くて胸が

きりきり絞られた。凄く似合っている気がして、凜がふさわしい相手といふように思えて、言いようのない気持ちが込み上げた。舞台の上の凜が、遠い存在に感じられた。

第一十一話 くるみ割り人形（後書き）

くるみ割り人形に関しては、ちょっと怪しいです。
すつとこどつこいだつたら、ごめんなさい。

調べられる範囲で調べてはみましたが……。

クリスマスを、柚希と亜衣がバレエで、碧とさくらが映画に行くのは、早い段階で考えていたんですが、林原くんまで参加することになつたのは、結構ぎりぎりで決定しました。
今日は、私生活でもクリスマス会で楽しい一日でした。

第一十一話 人肉饅頭屋の一週間

舞台が終わって、俺たちは建物の外に出た。暖房が効いた屋内から出ると、外の寒さに思わず身震いする。俺は慌てて持っていたダウンに袖を通した。

ホールは帰るひとと出演者に面会するひとで、じつは返していた。出演者には子どもも多い。父親らしきひとが、そこかしこで立ちすくんでいるのは、着替えが終わって出てくるのを待っているのだろう。凜の親父さんもいるかもしない。でも、探すどころじゃなかつた。

柚希たちもすぐそばにいた。人混みの中、だれも、はぐれなかつたようだ。といつても、柚希たちは、ここで解散だけど。ジーンズのポケットに突っこんでいた携帯が振動した。取り出して開くと、表示はさくらからの電話だった。

「さくらちゃん?」

『副部長、バレエ、終わりました?』

「終わっていました、建物から出たとー」

『瀬戸さんとそひで会いました?』

「こま一緒にいるよ

『あー、よかつた。瀬戸さんに電話したんですけど繋がらなくて』

「みんな、マナーモードにしてるから、気がつかないんだよ。柚希ちゃんに代わるつか?」

俺の言葉に反応して、柚希が振り返った。

『いえ、瀬戸さんに伝えてください。碧が気分悪くなつて、一緒に食事に行けなくなつたって』

『うわあ、柚希と碧は待受けさせる予定だつたらしい』

「気分悪くなつたって、碧ちゃんは大丈夫なの?」

途端に、柚希が心配そうな顔で覗き込んでくる。なにか言いたそ
うな様子の柚希に、俺は軽く頷いて制した。

『はい。でも、食欲が全然ないから、寮に帰つて寝たいみたい。こ
れから一緒に寮に帰ります』

碧とやくらは、大学の女子寮に入つてゐる。具合の悪くなつた碧
とやくらが一緒に帰るのは当然だと想つけど…。

「なんでまた? 映画に行くときは、元気だつたんだり?」

『映画観て気持ち悪くなつたつて言つてるけど、そんなこと、ある
わけないし、ポップコーンにあつたのかも』

ポップコーンは、あたるような食べ物じゃないだろう。

「映画、なに観たの?」

『人肉饅頭屋の一週間です』

じんにくまんじゅうや……タイトルだけで、ホラーでスプラッタな内容がバンバン伝わってくるんだけど……。

「…………えっと、確か3Dだったよね」

『はい。凄い迫力でめちゃくちゃ面白かったですよ。血飛沫あしふばせがこっちに向かってびざーって感じで、もう大興奮の一時間でした。この冬、絶対おすすめです！ 絶賛放映中…』

さくらよ、悪魔か、お前は……。

俺は、碧の身に降り注いだクリスマスライブの惨劇に、心から同情した。

「とつあえず、柚希りりんには伝えるよ」

『はい、お願ひしまーす。あ、副部長、メリークリスマスー』

「メリークリスマス……」

なんでこんなに明るいんだ。そんなに映画が、面白かったのか。恐ろしいやつだ。

電話を切つて、俺は事の次第を柚希に説明した。

「…………要するに『人肉饅頭屋の一週間』といつ映画を観て、碧さんは気持ち悪くなったんですね」

頷く俺に、柚希は頭を抱えている。

「「Jさん」と「なるなら……」

「合コンに行つてくれてればよかつた?」

「……それは嫌です」

嫌なんだ。合コンに行かれたら、碧が他の男とどうかなるかもと心配なんだな。せっかく、たぐいまれな美貌に生まれてきたのに、自信も余裕もないとは気の毒な話だ。

柚希は悲愴な顔で、訴えを続けた。

「小畠さん、本当に人間なんですか？ あんな危険なひとを野放しにしていたら、日本の危機だと思つんですけど」

テロリストじゃないんだから……、と言いかけた言葉を俺は飲み込んだ。「Jの状況でやくらの肩を持つほど馬鹿じやない。しかし、柚希とやくらは、よほど相性が悪いのかな。

さくらも、悪気がないのはわかるんだが、柚希を不幸に突き落す癖がある。今日のこともしかり。部室で胸を触らせたセクハラもしかり。

すぐ隣で、亜衣と林原が肩を震わせて笑いをこらえていた。他人事なら面白い話だもんな。

下手に渦中にいると、全然笑えないのが辛い。

第一十一話 人肉饅頭屋の一週間（後書き）

獵奇的な映画が映画館で3Dとかありえないんですけど、JUJUの部分はファンタジーと思って、目を瞑つてくださいませ（笑）

楽しく書けたシーンです。部室以外では珍しいかな。

凛が出でくると、シリアルになつて、出てこないとコメディーにな

るようですね。

最近、ジャンルのコメディーを恋愛にすべきだったかも、と悩んでます。

でも、恋愛といつほどにせ、なにもないなあ……。

第一二三話 ジュルックでクリスマス

「これかいどいわるっ。」

林原が訊いてきた。

「畠衣ちゃんたちは予定あるの？」

「いのあと、やへりちゃんと碧先輩と合流して、食事する予定だったんですね。」

「あ、そつか。じゃあ、ふたりになつたんだ」

待ち合わせをしていたのは、柚希と碧だけじゃなく、畠衣とわかくらもだつたのか。それじゃ、部室でおなじみの女子会だらう。

「だつたらさ、オレらとメシ食いに行かない？」

林原の提案に、畠衣と柚希が顔を見合せた。

「柚希、ジュルックに予約してゐんでしょう？」

「うそ」

「予約？ 食事の？」

「はい。以前、柚希がバイトしてたカフェバーなんです。カクテルやビールの種類が多くて、ご飯も美味しいんですよ」

「へえ、いいね。行こうよ。ちょうど因人だし」

「今日はどうも混んでるもんな。キャンセルしなくていいなら、好都合じゃない?」

「わづですね」

柚希が頷いて、行き先が決定した。

店に着くと、三十代半ばくらいのイケメンが、愛想のいい笑顔で近寄ってきた。

若いときは美少年だったんだろうなあ、と思わせる面差しだ。あまり家庭的な匂いがしないから、独身かもしれない。

「コズに亜衣ちゃん、いらっしゃい。あれ? 韶ちゃんともべらりちゃんと、しばらく見ない間に、雰囲気が変わったね」

俺と林原の方を見て、首を傾げる。んなことないのはわかってるだろうに、面白いひとだ。いたずらっぽい顔で笑つてるから、絶対、確信犯だぞ。

林原は「あらいやだ。変わってなんかないのに、変ねえ」と妙な科を作つて亜衣を爆笑させている。じついう奴なんだよ。

「不慮のアクシデントで、メンバー変更がありました。大丈夫ですよね?」

柚希がサッカーの監督みたいないと宣言。

「もちろん大丈夫だよ。ゆっくり愉しんでいい

選手交代は、すんなり認められたようだ。

「メリークリスマス」

乾杯して黒ビールを勢いよく飲むと、ぱはっと息をついた。

「感じのいい店だなあ。教えてもらわなかつたら、絶対わからなかつた」

林原は上機嫌だ。確かに、エスニックな装飾が施されているけど、波長のずれた物がところどころにあって、面白い店だ。

出てきた料理も変わった味付けのものが多く、見た目も色鮮やかで可愛い。男同士で飲みに行くときは、こんな洒落た店には行かないから、新鮮で嬉しい。見栄えのいい料理のわりに量も多くて料金がリーズナブルなのは、場所が表通りから外れているからのようだ。客席を見渡せば、結構、男性客も多かった。

「しかし、柚希ちゃん、本当に凄いな。惣介の写真のモデルが男だと訊いてたけど、実物見てびっくりした」

林原は凄い凄いと感動している。ここまでくると芸術品だよ、と美大生らしい感想まで飛び出したから、柚希も愉しそうに笑つた。腫れ物に触れるように扱われるより、気が楽なのかもしれない。

「よく驚かれます。私の場合、成長期の途中でホルモン剤の投与を受けたんで……」

「柚希は本当にひどかったんです。自分に対する嫌悪感で、死んじやうんじやないかと思いました。眠れない、食べられないで。医者もこのままだと、精神的にも肉体的にも、もたないと判断して投との決断をしたそうです。本来は成長期が終わってかららしいんですけど」

「へえ……、大変だったんだね」

「いえ」

俺も初めて訊いた。以前、柚希とカラオケに行つたとき、歌声まで女の子だったから驚いたけど、そんな経緯があつたのか。

「薬を飲めば、ある程度、男になるのを抑えられると訊いて、救われました」

「見た目以上に、苦しい病気なんだな」

俺は武智を思い出して俯いた。

柚希は自分の性別を受け入れられなかつた。成長して、異性を好きになり、男として生きる覚悟を決めた。

武智は、自分の違和感をずっと封じ込めて生きてきた。けれど結局、今まで守ってきたすべてを捨てて、自分を解放した。

同じ病気なのに、経緯も結果もまるで違う。どちらも大変な人生には違いないが。

このふたりがこの先、俺の助けを必要とするなら、ぜひ手を差し伸べたいと思つた。

「柚希ちゃん、いまはどうしてんの？ 彼女いるんだろ？」

「こまは服用しません。リハビリ中ですね」

「えっと、嫌悪感とかまだあるの？」

「嫌悪感というより、自分の性別に違和感があるよつな…。なんかうまく言えないんですけど……」

「うーん、わからん。女でいる方が精神的に安定するなら、男に恋愛感情を抱くのが自然な流れだと思うのに、柚希もややこしいよな。ただ俺は、柚希の性同一性障害は、普通と少し違うんじゃないかと思っている。柚希は女になりたいというより、男でいたくない気持ちが強かつた。男性嫌悪症がこじれたんじゃないかな。訊けば柚希は私生児で、家族は母親だけらしいし。

「ホルモン剤やめて、なんか変化あつた?」

「ああ。自覚できるほどは……」

「薬やめたからなのか、碧先輩の影響なのかわかんないけど、色気、出たよね、柚希」

「ああ、わかるよ」

亜衣の発言に、俺も相槌を打った。

「色気?」

柚希が驚いたように、まばたきした。

「前は綺麗なお人形つて感じだったけど、人間っぽくなつた」

なかなか上手い」とを言ひ。さすが親友だ。

「へえ、面白くな。恋愛で色氣か。惣介、お前も見習つたら？」

「俺は普通に恋愛してきたよ」

林原は「やうかあ」と皿を泳がせた。

「林原わんは副部長わんと、同じ高校だつたんですね」

「やうだよ」

「副部長わん、高校のときから」んな感じだつたんですか？」

「うん、やうなんだよ。変わり映えのしないやうでせ」

なんか失礼な言われようだ。

「まじめできつちつ枠内に收めてくるやつなんだ。唯一、変わつてるのは、血液型くらいかな」

「血液型？ A B型とか、RH・とかですか？」

「ボンベイ型なんだ」

「そんのがあるんですか？」

「ボンベイ型にもいろいろあつて、俺のはそんなに稀じゃないボンベイなんだ。一百人にひとつくらいだつて」

「でも、珍しいですね。事故に遭わないといいですね」

「そうだね」

「副部長さん、高校のとき、彼女とかいたんですか?」

「惣介は結構もてるよ。パンチが足りないけど男前で優しいだろ。でも、恋愛に関しては、横着だな」

「俺のどじが横着なんだよ?」

つきあつた相手には、俺なりに丁寧な対応をしてきた。林原も知つてゐるはずなのに。

「こいつ、自分が引っ張つて行かなきやいけない、年下の可愛い子は駄目なんだよ。つきあつるのは年上か『長』が付く同級生なんだ」

「長?」

「クラス委員長、図書委員長……他にもいたかな」

「要するに、しっかり自分を持つてる人がいいんですね」

「ピンポン」

「あーあ、横着……」

亜衣に白い目で見られて、俺は頬を搔いた。林原の指摘に、俺は自分を振り返った。つきあうことには億劫ではないが、相手の気持ち

や状況を考慮して、デートの段取りを考えるのは確かに苦手だ。
それなら、相手のわがままに振り回される方が気楽だった。

「そう言われると、そろかも……」

「自覚ないのかよ。頼りないなあ

林原は呆れた声で天を仰いだ。

第一二三話 ジュルックでクリスマス（後書き）

今夜はクリスマスイブですね。

私生活ではいつもとそれほど変わらず…といつか、年賀状に追われて一日が終わりました。

年末年始は、思うように時間が作れませんが、二十五話までと番外編は年内に更新したいです。

そのあとしばらくお休みします。二十五話が終わった後か、番外編が終わった後に、活動報告でお知らせします。

第一一十四話 翠の写真

「それで、柚希ちゃんの彼女って、どんな子？ 気になるなあ。携帯に写真入つてないの？」

林原が興味深げに眼を輝かせている。

「わういえば、『写したことない』です」

「[写真部なの]？」

「はあ……」

柚希が気の抜けた返事をした。

「他のカメラで撮ってるの？」

「いえ、一眼レフでも『写したこと』ありません

「人物は撮らないの？」

「練習で撮ることほど多いんですけど……」

「だれを撮るわけ？ 彼女を撮らずに

俺と柚希の視線は、亜衣に集まつた。

「亜衣ちゃんばっかり写してんの？ 彼女、拗ねない？」

「……よくわかりません」

「そういうセオリー通りの子じゃないんだよ。ちょっと変わってて
る」

あんまりフォローにもなってないかな。でも、言われてみれば、
妙な感じがする。

柚希が碧の写真を撮らないことも、亜衣の写真は数多く撮つてい
ることも。

「碧先輩の写真なら、わたしの携帯にありますよ」

「亜衣ちゃんの？ なんで？」

彼氏の携帯にもない碧の写真が、彼氏の親友の携帯にはあるなん
て、俺は不思議に思った。

「以前、写させてもらつたんです。学祭の名画に参加してくれるひ
とを、ブログで募集したとき」

「あ、そっか」

学祭の名画に協力してくれたときのブログだ。俺もそのブログは
見たことがある。名画のための撮影会を、亜衣が自分のブログで紹
介してくれたのだ。撮影者が柚希と碧であることを、写真つきで紹
介していた。

そのとき、亜衣が自分の携帯で撮つた写真を、まだデータとして
残しているのだろう。

亜衣が携帯を操作して、表示させた写真を林原に見せた。

「あれ？　この子、どこかで見たことある」

「え？　本当にですか？」

柚希が身を乗り出した。

「うん、もつと子供っぽい感じだったけど、たぶん同じ子だ。どこだつたつけ……」

「M大と美大はそんなに遠くないし、どこかで会つたことくらいはあるんじゃないのか？」

もしくは、碧の元カレが美大にいたりして。碧も柚希と出会つ前は、恋多き乙女だったから、ちょっとドキドキする。碧自身が積極的つてわけじゃないんだけど、風変りな性格はともかく、可愛い外見をしてるし、さくらに振り回されて合コンに行くことが多かつたんだよな。

「うーん、そうかなあ……」

すつきつしない様子で首を捻る。俺の顔を見て、あつと声を上げた。

「思い出した。惣介の部屋だ。お前、この子の写真、壁にいっぱい貼つてただろ」

「ああ、なんだ、そつか」

変な予感が外れてほつとした。林原は大学に来てからも、何度か

「うちに来たことがある。当然、俺の部屋にもあがり込んでるし。

「……松浦さん、ひとの彼女の写真を、自分の部屋に貼らないでください」

安堵していたら、柚希は不服そうに睨んでくる。

「でも、俺が撮った写真だよ？ 俺の場合、被写体のほとんどが人物だし。碧ちゃんだけじゃなくて、君の写真も飾ってるけど？」

俺にとって、自分が撮った写真は作品だから、他のひとが恋人の写真を部屋に飾るのとは、意味合いが違う。碧の写真も柚希の写真も夕焼けの写真も、同じなんだ。

「そんなことしてるとから、許嫁に誤解されるんですよ」

「許嫁？ 翁介、お前、許嫁がいるの？」

「親が勝手に言つてるだけだって。困つてるとんだよ」

「それにしたって、許嫁だろ？ どんなひと？」

「凄く可愛い子ですよ」

柚希がしつと囁く。

「へ？ 柚希、会ったことあるの？」

亜衣が驚いている。

「偶然ね。恋敵と勘違こられて『五年後は負けないんだから』って宣戦布告されちゃった」

「わわー、可愛いー」

「なに？ 五年後って、年下？」

「小学生なんですね」

今度は亜衣が暴露した。

「小学生～？ つーか、『眞部公認の許嫁？』

柚希と亜衣がそろって頷く。公認って、飲み会のとき話が伝わつただけなんだけど。

「はあー。熟女好きの息子に小学生の許嫁をあてがうとは。お前の母ちゃん、下手な芸人より面白いことするな」

おこおこ、なんなんだよ、それは。

柚希と亜衣は涙を流さんばかりに笑い転げた。俺はひとつもなく大きな溜め息を落とした。

「まあ、とりあえず、婚約おめでとう。結婚式には呼んでくれよ」

肩をとんとん叩かれて、俺は眉をひそめた。

「だから、なに訊いてたんだよ。俺は婚約を解消したいんだよ」

「なんで？」

「小学五年生なんだよー。生まれたときから知ってる子供もなの」

「五年も経てば、高校生になるじゃん」

「あのなあ……」

「惣介、お前なら、草食通り越して、断食男子で五年や十年、やり過ごせる。頑張れ」

「嫌だよ。修行僧じゃあるまいし……」

そんなことしたら、下半身の使い方もわからなくなりそうだ。

俺がブツブツ不満を口にしていると、携帯の着信音が鳴った。満席で店の中は賑やかだったから他の席のひとには気づかれなかつたみたいだけど、マナーモードにしておくべきだったかな。さくらの電話のあと、解除してたんだ。

携帯を開くとメールが届いていた。送信者の名前が表示されていない。

訝しく思いながら、俺はメールの受信ボックスを開いた。

『そうすけ君へ 今日は来てくれてありがとうございました。お花、すじぐれしかったよ。メールアドレスは、おばさんに教えてもらつたよ。りんよ』

凜からのメールだ。

携帯のアドレスに登録したのは、携帯番号だけだった。だから、メールアドレスは未登録だったのだ。

ところどころ無意味な絵文字で飾られた、幼いメールだった。それほど携帯を使いつぶしていいのが、なんなく伝わってくる。

ありがとうございました、なんて凜らしくない。たぶん、母親から教わつたり進言されながら打つたのだろう。

写真が添付されていた。俺が買って受付で預かってもらつた花束を抱えた凜だつた。舞台衣装のまま、笑顔を向けていた。

「あれ？ くるみ割り人形の出演者？」

林原に横からメールを覗き見られた。

「ああ」

「そういうやお前、近所の子が出演するつて、花、買ってたよな」

「！」の写真の子が、花、贈つた近所の子？

「ああ」

「……もしかして、その近所の子が許嫁か？」

「…………」

大雑把なやつなのに、なんでこんなときだけ鋭いんだ。

「大当たりですよ、林原さん」

柚希があつさりぱらじってしまった。なんの恨みがあるんだよ。

「え、本当に？」

「さやー、わたしもどんな許嫁か見たい～」

林原が俺の携帯を取り上げて、写真を食い入るように見てくる。

「林原さん、どんな子ですか？ 可愛い？」

「…可愛い……？ と黙つたび…？？？」

歯切れの悪い言葉にじれり、亜衣が携帯を奪い取った。

「うわー、可愛いー、若いですね～」

そりゃ、小学生だから……。

「中国に出てた子なんだ。先に聞いたければ、もつとちやんと観たのに、残念～」

「その写真見て、亜衣ちゃんはどんな顔の子か、わかるの？」

林原に訊かれて、亜衣は「ああ、そつか」と笑った。

「舞台化粧してますもんね。見慣れないとわかりにくいかも」

「圭塚とまではいかないけど、独特の顔に描くんだな。客席から見てるときは、全然わからなかつた」

「ステージにそのまま立つと、顔がボケるんですよ」

「へえ～」

俺も感心して返してもらった携帯の[写真を見つめた。確かに、客席までは距離があるし、バレエであれ宝塚であれ、表情を伝えるにはそれなりに工夫が必要なんだろう。映画やドラマとは違うんだ。

第一二十四話 碧の写真（後書き）

第一一十五話 クリスマスの春

「あーあ、なんかみんな春だなあ。クリスマスなのに」

林原が頬杖をついた。柚希はともかく、俺は春じやないぞ。

「羨ましいですね」

力クテルを傾けながら、亜衣が頷いた。

「亜衣ちゃんは？ 彼氏いないの？」

いたら、クリスマスイブにこんなところにいないよな。

「こまほこません」

「オレなんかどう?」

「芸術家の彼女になれるほど、器物が大きくないんで……」

亜衣がやんわり断つた。相手を立てながら断る高度なテクニックを用いるところから、断り慣れしてる感じだ。

「オレ、陶芸じゃなくて油絵だから、器なんかいらないんだけど

わけのわからない理屈で口説いているが、まあ、無理だろうなあ。林原はいい奴だけど、軽い感じに見られるし、亜衣は……そういうば、亜衣はどんなタイプが好みなんだろ?」

「林原をさうして、面白いひとですね。しっかりきつちつお断りします」

やんわりお断りしても効果がないと思ったのが、亜衣は切って捨て始めた。

「嫌だなあ。そんな露骨に断られるとは思ひないよ。それじゃあ、亜衣ちゃんの好みってどんなひと?」

「普通のひとです」

「まさか、惣介みたいな?」

ひとを普通の代名詞みたいに言つた。

「副部長さんは成熟したひとがお好きなので、わたしみたいな年下は眼中にないみたいですよ」

「振られたな、惣介。よかつた、よかつた」

まつたく、なに言つてんだか。

柚希が鞄から取り出した自分の携帯を開いていた。時間を確認したかったのか、俺や亜衣が携帯を触っているのを見て思い出したのだろう。

「あつ」

「メールか着信履歴でもあつた?」

「うん。あの、申し訳ないんですけど、先に帰ります」

「ああ、大丈夫だよ。お疲れ様」

サークルじゃないのに、お疲れ様は変だつたかな。なんか、癖になつてるかも。

「あの……亜衣、女の子ひとりになるけど……」

「あのね、柚希だって男なんだから、もともと女の子ひとりだったんだよ」

「どうやら柚希本人も、とつさのときは自分を女の立ち位置にしてしまつよつだ。」

「あ、そつか。えつと、松浦さん、林原さん、亜衣をよろしくお願ひします」

「まかせといへよ。オレが責任もつて家まで送つていくから

林原が胸を叩くのを見て、柚希は複雑そうな表情になつた。

「……できれば松浦さん、お願ひします」

林原は信用できないと思つたらしく。まあ、妥当かな。

「わかつたよ。君も氣をつけてね」

「はい」

「わたしの心配より、このふたりの心配した方がいいんじゃない？」
「この店がどういった店か忘れたの？」

俺と林原の心配ってなんだ？　この店がどうかしたのか？

「…………松浦さん、林原さん、無事を祈ります。じゃあ

「はあ？」

なんかよくわからないことを言って柚希が出て行った。今日の食事は飲み放題のクリスマスコースだったそうで、柚希はきつちり自分の分を置いて行った。

「あれ、絶対、碧先輩からのメールですよ」

「なるほどね」

「柚希が恋を感じるひとつて、碧先輩だけなんですね」

恋を感じるひとか……。なかなか文学部らしい表現だ。

「愛情は親でも兄弟でも友達でも感じるけど、恋を感じるのは恋愛相手限定だから、すぐ特別なことだと思いませんか？」

「言われてみれば、そうだね」

「圭衣ちゃん、オレに恋を感じる予感しない？」

「全然しません」

「おかしいなあ」

おかしいのはお前だ、林原。

しかし、いつになくしつこいな。わりと来るもの拒まず、去る者追わざず、つて感じだったから珍しい。

「それより、やつを変なこと言つてなかつた?」

「変な」と?

「俺たちの心配がひとつとか、店がひとつとか

「ああ、気がついてしませんでした? ハーフゲイのお客さんが多いんですけどよ」

「ええ、やうだったの?」

「気がつかなかつた。辺りをじっと見渡すと、来たときより男性客が多い。」

「今日はクリスマスだから女の子多いけど、普段は時間が遅くなるほどゲイのお客さん増えるんですよ」

「…………」

俺と林原は顔を見合させて睡を飲み込んだ。

「そつと店の様子を伺う。どうなんだろう。そんなに露骨な客も見当たらぬけどな。女の子同士の客もいるし、男女のカップル

もいる。男同士だからって、ゲイとは限らないはずだし。
亜衣に抱かれたんじゃないのかな。そう思っていたら、林原に袖
を引っ張られた。

「あっち、そうじやないか？」

耳元で囁かれて、俺は視線をカウンター席に向けた。なるほど、
ちょっとそれらしい感じがする。

「亜衣ちゃん、ここってそういう店？」

「べつにゲイバーではないですよ。碧先輩とさくらさんも来ますし。
店長さんがゲイなんで、そういう知人が集まってるんですよ」

店長つて最初、俺たちに声をかけてきた人だよな。服装が他のス
タッフとは違う。かなりの男前なのに、女に興味ないなんて勿体な
い話だ。家庭的な匂いがしなかったのはそういうわけか。

「まあでも、オレらは関係ないよな」

林原が笑い飛ばしていると、亜衣が神妙な口調で呟く。

「ふたりとも、結構いい線いつてますよ。特に林原さんは狙われそ
うな気が……」

「ははは、よかつたな、林原。モテるみたいだぞ」

「……モテてどうすんだよ……」

「…………」

「……とりあえず、飲んだし食つたし、帰るつか？」

「やうだな」

俺たちは、乾いた笑いで顔を見合させて、溜め息をついた。

「そうですね。じゃあ、お開きにしましょ！」

「亜衣ちゃん、帰る前にメールアド、交換してくれ~」

「お・こ・と・わ・り」

玉碎の林原は、本気か冗談かさつぱつわからないけど、あからさまに落ち込んだ。

「じゃ、じゃあ、ブログは見てもいいだろ？ ブログしてねって言つてたじやん」

亜衣はしばらく考え込んでいたが、諦めたよつて苦笑した。

「『あいあいのあいある日常』で検索していくぞー」

「わかった。ありがとー」

嬉しそうに笑う顔が、本当に幸せそつだった。
とりあえず林原には、亜衣が恋を感じるひとみたいだ。

お前が一番、春だよ。

第一十五話 クリスマスの春（後書き）

副部長視点の本線は、この話が今年最後の更新です。
読んで下さった方、ありがとうございました。

次の更新予定は未定です。すいません。年末年始はなにもできない
ので。

明日から、5日くらいの予定で、番外編を更新します。
先に帰つた柚希の話になります。

予定は活動報告に載せますので、覗いてみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777z/>

M大写真部副部長の喧騒

2011年12月26日22時49分発行